後撰和歌集　下

後撰和歌集巻第十一

恋哥三

女につかはしける　三條右大臣

なにしおはゝあふさか山のさねかつら人にしられてくるよしもかな

在原元方

恋しとは文にもえこそいはし下ひものとけんを人はそれとしらなん

返し　よみ人しらす

下ひものしるしとするもとけなくにかたるかことはあらすもあるかな

女のいと思はなれていふに侍りけれ

うつゝをそみるなれとのおもひきは錦すくふ小草ともなりけり

文つかはしける女のおやのいたく制しけれは　平中興

たむけせぬ別するみのわひしきは人めを旅とおもふなりけり

かくそあるなる事よ侍けり女よんらうりにはる[ね]たとこれてかくいひくもんかなしれたし

心にはおもふなかれはなんえあちなるねとよ人のそれは[人]をとへてゆらけりに見えさり

けまたし　女

やとへて侍にもみえぬねまはつきまちのおもてもえたし

思しらす　よみ人しらす

思はんとたのめし人はかはしとやとられぬ我やおもひぬらん

源さねあきら絶むとしけるはしめつかたに

つかはしける　　中務　伊勢イ

いたつらにたひ〳〵しぬといふめれは逢ふには何をかへんとすらん

返し

源信明　さねあきらイ

しぬ〳〵ときく〳〵たにもあひ見ねは命をいつのよにかのこさん

としくみんしける男のあからめのところにいにけり

かくとききつけて侍りけれはいかりにかへし

つかはしける　　本院侍従

絶ぬらんけるゝともゝ人をみはしむかしおもふを常に也

大納言国経朝臣の家に侍りける女に平定文

いとしのひてかたらひ侍りて行末まて契り

侍りけるころこの女にはかに贈太政大臣にむかへ

られてまかり侍りにけれはふみもか

よはすへきかたなくなりにけれはかの女の子の

五つはかりなるか本院の西の対にあそひ

ありきけるをよひよせて母に見せ奉れとて

かひなにかきつけ侍りける

平定文

昔せし我かねことの悲しきはいかに契りしなこりなるらん

返し　　よみ人しらず
かのくに非拠りきん定まる藤綱まゆゝ秋はこれ
おやけつゝひとてあつまのくに人ゆかりけり
猶まゐりめてかひありて給女よかくやむ
ことなるみちなれはいふをもわくことまうてある
とやてさり給そとのちに加ふあさり
めの海ことありてめし人倩まかれいとこの女
やうてあこひあしとひよつくりのありを
ましみちまて人の心さしをしりて給けり
くれとりめふあやをふさむと清かなく

つかはしける　　清原諸実
逢ふことはあやにくに過ぐる梅さむしむも山をこえぬるさ
かく夜のまにとおもひし心にたえて山の甲斐と成けり
返し　　よみ人しらず
人のうへにつかはしける
こまなりける女
菊かとも思ふ人にされとおもふ絆ねよ見えんと思ふさう
かねさ真忠のおもふひ給けるをさりてしと女
まつさてそれより子すゝれ使よりくなちて
ゆかりけまでし　　かくの女

思ひしぬ身をなほおもひて我たかみえされぬ山をしようそにきて
あさはの花まへはなつかしけれはしまひた
ところもおきていくつ給けるかり

よみ人しらず

あすをもみちとともに山桜をみていろをみむむ
内にまゐりてひさしうなりにけれと
こに　　とんか
りしさかきのえたをもて山ちや今は人の香ながね
女のもとにさぬきぬをかくとりにつかはし
すとて

これまさの朝臣　一条摂政伊尹
天徳四年八月参議左中将
天禄三年薨

あさか山伊をわけのわかれもとて夜もふかくなりけりと人やあらん

題しらず　　つらゆき

いつて我人をもとらんおもかげのわかれやなかにはると
あつさにも消えかへりける露のいのちさへかなしむらんそ昔

左京大夫平朝臣　致仕中納言

よみ人しらず

しのゝめにあそびし枝と露やおきしひやらむ

平中興　左衛門権佐
蔵人従五位下　季長男

あつさをもしひてあつかける人にしらて涙なにかあり
かくしてありける女にはやくむかしと云て文

えあはす侍りけれはつかはしける

兼輔朝臣

秋萩のこれに露にぬれしよりわか衣手はいまもかはかす

題しらす　元方

君と思ふ心を人にこゆるきの磯の玉もやいまもかるまし

とやある女に志のひてつかはしけれとことも

志らしハ人に志られしとおもひけれはて

よみ人しらす

なきなそと人にはいひて有ぬへし心のとはゝいかゝこたへん

すきなる女ちけりける

伊勢

こよしれて玉かゝぬ身の思ひこそはかなかりける物にはありけれ

志のひてすみ侍りける女につかはしける

あつたゝの朝臣

逢ことはいつさかに出なん志のゝさき思ひつゝそ物なけかに

あひしりて侍りける人のもとをはなれむと

かりてまかれぬへく侍りけれはつかはしける

よみ人しらす

あひみてもわかるゝことのなかりせはかねて物思はさらまし

人のもとより暁かへりて

閑院左大臣

ひろまに遠かりける夜ぬまとほし袖の色かはりけれは
はしゆき

別つる程今宵に白波の立かへりてもみまくほしさに

女のもとにつかはしける

これまさの朝臣

人まねの月いそけれとこえてなくこえそえぬ相坂の関

かへし

小野好古朝臣女

東路にゆきかふ人にあらぬ身はいつかはこえんあふ坂の関

女のもとにつかはしける

在原こゝよし

つまなきは人よりまさにとせし我もいつこえんさそふ縁

かまへてにまかりける男のもとにさうそく

てうしてかくまかりけるにあつらへにうらと

こさいちあんとかきていひたりけれは

小野遠興かむすめ

ゆくからぬ中におとこそらしと逢そそこしとさねやかぬる

五節の所にて閑院のおほいまうちきみに

つかはしける

これまさの朝臣 小一条太政大臣

ときはなる日影のかつらけふしこそ心の色にふかくみえけれ

返し

稚ともかくは思ひにふくらん色とこそかりにかへたるまん

かちつかの人て月秋よおりさけつゝ見んて
ひとりかりそれつゝいりけり

こさよ人

大空にかゝる月よみなも月秋よまけし心と思ふらん

左兵衛督師尹卿にかはりてよみ侍りける

本院兵衛

春来てはまつこそなれ鶯は梅かえにいりなれなそなり

読人しらす

こうちの乳母

久方の月は我身のことそ思はれいつれの方に枕さためん

在原元方

夢にたにまたみてあかに恋さへいつよりかつらつらなからん

壬生忠岑

忘ふともそれを梅かえりける君にのみこそいひなされ

戒仙法師

あな恋しゆきてや見まし津の国の今もありてふ浦の初嶋

屋むしとなれとはよりてときき給はり
あかむ月計になんまかりかへるとひ
てはゝかりてみちよりつかはしける

清ゝ仲文

月ころ君をまたむといひし夜月ゝまへそてぬらしを
おなしく雨によ家けるへしけてつよみくし
けり女につかはしける　これ孫
伊勢の海にしほやくあまの藤衣なるとはすれとあはぬ君哉
題しらす　これのり
まことの庭ゝきてしらん君かためにしふくのふかきをよ
人のもとこふくゆくへとおもひしりてつかはし
ける
右近　季縄女
かく夜そまてたのまぬ時そなれ人のつまといふなり
人のもとにまかりけるにものにすへく掛
いひけるをとかくもあまりもいはてくさ
きられて帰りて又のあしたつかはしける
在原守正　兼輔卿男
おもしろ波のゆくへつきれともしはよせて数そしらき
かひしりて帰りける女の心をやしにかえ
侍けるにはなかりしける
藤原のちかけ　入道
よそにあらくれつゝみよそちに思ひまなく人の数ゝ
男の心やうやくかはるにかれてゆきければ

よた

はかなさをもらさしとせしみしことも我身にかゝる世中を侍（へ）
世まんかしおほしとひつゝしありけれは
世中の人の心さへあきはてゝはたのみかたき
ことなしとひとく侍りけれは

在原元方

淵は瀬になりかはるてふあすか川渡りてみてそしるへかりける

題しらす　　伊勢

いとはるゝ身をうれしとそ思ひける何かあすか川ふちせとも見む

返し　　贈太政大臣

あすか川せきてとゝむる物ならはふちせになると何かいはせん

女のもとにつかはしける

右大臣　九条

河原川の渡りにけふは渡りぬる雲のうへにやおもひこそへし

あまの川雲のみなかにおもひかは世とゝもにわたるすへなき
せきそつかりける女の文とゝもにたゝよふつ
まうすとききていさいはひかしまといひを
くり侍りけるかへり

贈太政大臣

松山につらきなからも波こさんことはさすかにかなしきものを

家に侍りし女をかくしてひそかにあひ侍りて

いかんとのみいひけるにあさくまかりけれは

枇杷左大臣

なみのまにあやなくさめよいそふれをおりはつることもおもふらく

返し　伊勢

こゝろみとおもはゝことをしるよしに袖やぬれにし

なかしかりていひかし侍る女のもとより

人すなかしぬやうにいひ侍れし

もせ枝の朝臣　中納言兼雄

しほのまにあさりするあまもおのか世ゝかひありとこそおもふらなれ

題しらす　贈太政大臣

あらさらくなそら松山波こさんことをいさゝにおもひけるらし

返し　伊勢

岸りゐて末しみらゝは末山と下りて波にこさんとも

ゆりつとひさて侍ける男の心かはりにけれは

もとしそのまりをと返しやるとて

これもかの卿のむすめあいまされ

よそにのみきけさこりつむ身をは何なをやゆりてみるらむ

人のほしくなりにけれは袖とふ人をつひ

みく　　　　よみ人しらす

人しれぬ我おもひの涙をは袖につけてそみすへかりける

梅のはなをかさしにする男かはしまにはなれりけるをんな
とこさて　　藤原真忠かいりけるに

真忠右大臣恒佐四男天慶六年右少将九年左馬頭

山のはにいりにし日の雨くもれは雲ゐなからもあはれとそみん

御ちかりれ宮よみつゝしらかきを起すに

こゝろとの花をけふしもたちかへりつゝ　暮

りうられ給に

なきなをすゝく涙のいとくそひぬるはあさましきまて袖のぬれぬる

よみしらす　　源たのむ　歟

菊ならてとこなつ花ハなかりきとおもほえ御とて人のおもふとこそ

おくる成しけるなたれかつまをかしほに

よみ人しらす

ときはのやまの長月にかへるとやちそてとそを

返し

時のまに風ていとおもふ心をそむかるゝ菊にまいらせさせ

よみしらす　　よろぬし

玉津嶋ふかき入江をこく舟のうきたる恋も我はするかな

紀内親王　一本二のみこ

津の国のなにはたゝまくをしみこそすくも焼火の下にこかるれ

人のもとにまかりていれさりけれはすのこに
ふしあかしてつとめていひつかはしける
よみ人しらす
夏夜はもやとさす人のあかしませは寝覚に露はおかしはま
返し
涙川なかす寝覚もあるものをはらふはかりの露やなになる
人のもとにまかりてえあはさりけれはつかはしける
思ひあまりなけきの方そなからましにあらは玉もとはへやおきまかはね
返し
君のおもひおふと波のたけにもあらは玉もとはさらん

心しおほそくいひわたりけれとつれなかり
けれといひわつらひてやまむと思ひそめて
つれなき心をはしらすありといひつかはしけれは
かつきやくあはれ桂におもはそめそなたなつかしにせめ
人のもとにつかはしける
右大臣
くれぬまのみをは思はて人の世のあはれをしるそかつはかなしき
つりとののみこにつかはしける
陽成院御製
綏子 仁和皇女 母同実平 配陽成院 号釣殿宮
つくはねの峯よりおつるみなの川恋そつもりて淵となりける

あひしりて侍ける人のまうてこすなりて
のちふみもかよはすゝ忘とのみいひおく
又かくともきこえ侍られはつかはしける
よみ人しらす
我しの雲ゐにかゝらさりしは今は跡のゝ忘まそ有ける
返し　　小野美材王
今はとて別るゝ嵐はおもひ風そふとしまやは
男のきしこさとやうく深きゝにみしられ
て　　小町
心から紀のうき身にのりそめて色とひと夜にねまも有て
おきき

男乃心ほしく思ふまゝになるを女あをとはま
よかりけるをともせぬとよひつかはしけるき
まてし　　よみ人しらす
三重とあへぬ思心乃やまとりはつまとなるへく人をと頼ましやは
秋のよ女にあひしかかしきそのちはよかなん
とちるよ紙あてさせくかゝしくにつかはきる
藤原滋幹
千早振神ひきかけてちかひてしこともゆゝしくあらかはすなり
菱
院乃やましとにおふなつかうまつるとて
右大臣

こひには我そいりてまとはるれあやなく君や涼しかるへき
かねみちの朝臣まうてこすなりてひさし
くとふらひて侍りけれは
元平のみこのむすめ
二品弾正尹陽成院第二 左大臣顕光母
わか袖の色もこえぬる松山の浪のこゝろはいかゝなるらん
をとこの女のもとにかへりきむとよて男のもとにつかはしける
よみ人しらす
我宿のいけともおほくやしられぬる堀中山にふかき涙さへ
女のもとにつかはしける
源中正
あふみちをしるへなくてもみてしかな関のこなたはわひしかりけり
返し
しもつけ
あしそてやはしらぬあふさかの関はこゆともあさくそ有けり
女のもとにまかりてあふみちやいりねとのこ
いひをれと
よみ人しらす
つまなきをとこのさかりにそはへるもいとはしけ
あつしれけるとの家にやまとにいふなつ
りけり
左大臣
とふしの国にありしとき思ふそとさふらうしまにとあれ
いひかりしきある女のうへはしひしれ孫といひ

待恋れとて　いせ物語

我身をはみつゝひとはしに忘草忘るゝ人はあらはしのひてよひけり

あひみんことをはむ志ひのはしきは人まふのまそねあ縫

藤原ありよし

物いひ侍りける男いひたえていてはせんかたも
ともいひはなちて侍れはいひ侍りける

よみ人しらす

小山田のなはしろ水はたえぬとも心の池のいひははなたし

方たかへに人の家にまかりて侍りて

くりて侍りける

千世へんと契おきてし姫松のねさしそめてし宿はわすれし

物いひける女のせうそこをかよはしてつかはしける

源重光朝臣

花とみよ人をもすさめぬ恋とてや鳴虫の声はわすれぬ

人のもとよりくりかへしてまうさくつかはしける

坂上これのり

あひみんとはなくさむやとそ思ひしにふる□すとも恋しかりけれ

後撰和歌集巻第十二

恋四

女につかはしける　敦忠朝臣

我恋のかすをかそへはあまの原くもりふたかりふる雨のこと

三[illegible]まかりける女を思ひいてゝつかはしける

よみ人しらす

うらみても身をそ[illegible]のやまとなてしこゝろやかまし

女につかはしける　枇杷左大臣

山彦の[illegible]我独のみと思ひけるかな

月ころわつらふ事ありてまかりたえて侍ける人のもとに思ひつかはしける

紀友則

玉もかるあまにはあらねとわたつみのそこひもしらす入心哉

返しも侍らさりけれは又つかはしける

みるもなくめもなき海の磯に出てかへるかへるもうらみつるかな

あさに見え侍けるかなとこに

よみ人しらす

こりすまの白波立出てよるほともなくかへるかなに

かひもありて待ける人のおもはん方へまかり

侍れは

関こえてあ[illegible]のもりのなかれすとも忘すなよ[illegible]

返し

ちかけれは何かはしるしおほ坂の関のかけもてかよひなれなん

返しつかはすとて　平なかきのむすめ

今はとて梢にかゝる空蝉のからを見んとは思はさりしを

返し　源臣城

忘らるゝ身をうつ蝉のから衣返しはつらき心なりけり

物いひける女のみそかにてかへるとて

よゝ人へ遣す

新よりふみしりやおこせたりけるつかひかへしにてまゐらす繞

男の物言ふときゝて女の中の家にはなり

てなかれけるとも見えさてつきすやありきんともおもひ

きこえけれは男の中なりにはこのちあらそひたて

足曳の山田のそほつうちわひてひとりかへるのねをそなきける

女につかはしけるのこゝひそかにひそ

とかくつけて年へてふたりいつはりけり

女につかはしける　贈太政大臣

あふ事はいまはなくと岩の上の松にそまことふる

きてまたれいひそめてし物をはいはしにゆく忘遣

伊勢

返し

我宿と頼むよし野に君し入ハおなしかさしをさしこそはせ

題しらす　よミ人しらす

紅に袖をのミこそ染てけれ君をうらむるなみたかゝりて

つまなくみえける人につかはしける

紅に涙うつるときゝしをはなといつはりと我思ひけん

返し

紅なる色こそは縁なる袖も紅葉とみてまし物を

あひしりける人のもとにかよひて別にける年月をへ

てもかへらんとかきて侍けるふみをもえんあてつかはしける

いにしへの野中しみつのみるからにさしくむ物は涙なりけり

思ひて侍て男のもとにつかはしける

あま雲のはるゝよもなき物は袖のみぬれて涙なりけり

方ふたかりとて外ところにまかりけれは

逢ことの方さへかくて君こすは思ふ心のたかふはかりに

あひしりける人のひさしうとはさりけれは

もつかはし侍る

忘れぬともいひしとは待れのひさしうなりぬ人のとはすは

題しらす

これまさる涙の色もとひそなきみせつる人の世をなかれは

女のもとにつかはしける
住吉の岸にきよするおきつ波まなくかけても思ほゆるかな
返し　　　　　　　　　伊勢
住の江のめにちかゝらは岸にゐて波の数をもよむへき物と
はらからなりける人のもとにつかはしける
忘てんと思ふ心のあさからは忘れそしなまし世ゝよ
へし　　　　　　贈太政大臣
りしとやとおもひんとたのますかく梅か枝よ鳴て来ず
題しらす　　　よみ人しらす
おふとふにいはてに思ひ物は忘るゝ枝をおほし物と
なきにのみ声をそへて武蔵野乃山下にあらぬ様
秋きりの立ちてゝとめていつけまし
この木ひかりあんいふつ人とのひかりなれ
　　　　　　　　伊勢
雁そやとは限乃立おくれとひよわへおくりのあかすに
人のうちに思ふとやはかりきん
忍ふ草思ひそめてよひとはいはねとしらは波なりきて
題しらす　　　よみ人しらす
白露のおきてあひ見ぬことよりはきぬかへしつゝねなんとそ思
人のもとにつかはしける

としへて家をなけきわたりしか女には君をしらん
女のもとにつかはしける
朝忠卿
白波のうち出る濱の濱千鳥跡やたつぬるしるへなるらん
女につかはしける　大江朝綱朝臣
おほかたはなそや我名のをしからんむかしのつまと人にかたらん
伊勢かもとへ人よりまうてくなけきさわきとこそ
てつかはしける
贈太政大臣
えそふかにおもひかけたるひそめかき人のこゝろをかけつゝそふる
返し
伊勢
よのつねの人の心をみるはなかなかにはなけれなくさまを
津の国のまろの山へいつとかへりくるなりし
平なかきむすめ　中興
あみ深のくまはみ山はいつしへはたちつゝもゆりさらん
あひおもひて侍る人のまれにのみみえけれは
返し
伊勢
月をこそ影はよそにみゆれともなかるゝこともさそはさりけり　ゆくへ
わするなんすむをとこありける女を思ひてかつら
うとかりける人のもとへ
たかさこの松とみえける人は志らぬをしのひてこそなれ

返し

時ならぬ桜のみとりをかさねしにひまなく桜さくやまさらん

色を見すしかりにくさへける人

つかはしける

水鳥のはかなき跡に年をへてかよふ斗のえにこそ有けれ

返し

波の上に跡やは見ゆる水鳥のうきてへぬらん年はかすかは

世をそむきつかはしける女のもとよりいひおこせ

とふこともありやと待ちにいひ侍るはたのみて

いひおこせけるに桜あひてえ聞えしきこゆる

それは忘れし恋ありしといふ事はかくはと

いひけるを聞きにけるつかはしける

流れ行世をは白波それはと思ふ舟そつなき

返し　　三条右大臣

わたり川ふかきにあさきをいふ舟の心からこそ頼みなかりけれ

いとこのひてさしふ人のもとにつかはしけるに

見えけるまでに　　よみ人しらず

花さきてたまに出でつゝとゝめなき玉まくさきゆる秋の露

心にしもあらぬに見えしける人よりつかはし

ける　　なかれのむすめ

まうさりし秋はさみたれとよみし人の心はかはらしなとゆくかは

返し　源是茂朝臣　中納言[illegible]男 光孝源氏 天慶四年薨五十七

君を思心なからは秋のよはいつまさるらむおもふ心も

ありし比よ近江といふ人とものいひてかくしひ
侍けるを秋になりてうけりと人をこせ侍
やまふれはその女なりけんつかはしける

坂上つねかけ　常景

鏡山あきてこそみるしは秋霧のはれさやみえむあきをことや
なひきりて侍女の人のはおこなひける侍りける
まつりける

平中興朝臣　希世 太中弁

枝なくも人はおくらむかきねをもほのこをもつくさめ
人のもとにまかりて侍けるにひとりをはしの
こふ物あまりかけりけり

菅原成國

秋の田のかりそめふしもしてけるかいたつらいねを何につまし
平かねきかやうやうかれかたになりけれは
つかはしける　中務

秋風の吹につけてもとはぬかな荻の葉ならは音はしてまし
五月をまつ世そこし侍ける人にまかりつかはしける

よみ人しらす

君みむとていくよへぬらん年月のかはるともなくわかつ後か

女によみつかはしける

中々に忘ひきていかし我身はわすれぬそらむておる

返し

忘るとも思ひてみるかなしさにわすれねはわすれぬらく

人はつかりしきら

歌ともひたるとなり世中に何よりもしく思ひあきん

三年まつになりける男はつかりしける

兼香殿中納言

このくれのまつのえにかゝる白雲はさえよるへまつとも見えよ

五年まで待けるに女によみたりける

よみ人しらず

菊のむら心そく霜よりもあへくを忘ゆるかな

返し

今はとてうつりはてにし菊はもとの色とは誰か見るべき

人のむすめにいとしのひてかよひ待けるに

きびしきさそとておやのまもりけれは五月

なか雨はつつみけり

かくしてもくもはひかたへくめにいる雲井にかりのなくらん

まつおる年すまち女のもとにあへしとありけり

けさハ起ける[illegible]

又つかハしける

[illegible]くハ君となけきの池よらむ身をなけつとも人まさらめや

女よりつかハしける

きのふの[illegible]ハ夕[illegible]のそそみをたとりつゝ

返し

かのそこもめ[illegible]

せりそこ[illegible]つゝけるとも[illegible]

きしつかれハえあひ侍して

源よし（善）の朝臣
寛平五年右少将
昌泰三年左中将
参議 卒 男

[illegible]

返し

春澄善縄朝臣女

逢坂の関とりはつ我なれし[illegible]ふる人[illegible]

女のもとにつかハしける

よしの朝臣（善縄）
貞観二年参議
十二年従三位薨年七十三

足引の山下水のこかくれてたきつ心をせきそかねつる

返し

よミ人しらす

こかくれてたきつ山水いつれかハ目にしもミゆる音にこそきけ

人のもとよりかへりてつかハしける

[illegible]女

鳴のなかし浦には白露のおきてまとひしきかゐせましや

返し　　よみ人不知

おきて行人の心を志らし露の我こそまつはとひもえねまし

女のもとに男かくて世をやつしさんたつさ

このとふへと紙にひつつしありけれは

たかさこの松とひつつ君をかくぬるとこさはなまん

人のむことあれりとに志のひつてかよひ侍けるを

おやきつけていとといひそれはありて後

かへしける　　つらゆき

風といひし男煙のたちいてし松のうら海の潮てなかき

なしめて女のもとにつかはしける

よみ人志らす

いそのかみ我かさりなきこゝろをは雲のふくとも人をこひ[illegible]

君かねにてく梅の山に行るいつまてあさか[illegible]まはなからん

世にそてかよりしける女かもとにあさはま

みし侍りけれは

なにてあさ露ふかよふ玉しぬれなくてかひあかしとそ君[illegible]

女につかはしける

たと　わか身の

かくつま人よおしねとひのいつれは波の月はらさそ[illegible]ん

人ありてはまゐりてあしたにかへりけりきか
あらくの次日はそのほどに思ひて色はさらに出さしとなん
大将の宮まゐりてひける女とさとひかさねてに
成くらとさきにありありといひて女く
ひさしうまうすなるはなりこの女思侘て
式部卿の宮にまうしてこきうりと見えけ
ましていとひつかし書
ころなりの宮をのしかりかくるてはまくる者とや驚きん
くて行かりしありけるはよ宮みならでなき
さりにあとにかくとひきんとまりまうして

うしろめたなやましくてなんあるまじた
あとかりといひをくりて侍ければさてく
つかはしける
さいしきぶの宮といひてをやんごとなき中に何よりたまえけり
越前のかみに侍りける時のその国の藤原清秀
がむすめをむかへんと契りておほやけごとに
よりてあからさまに京にのぼりたりける
程にそのむすめ真延法師にむかへられて
ありけるにかれも国にかへりてきゝてつ
かはしける
忠房朝臣

いふなれはなかなかにしとも聖へのおさらいに付よりけり
せうそこつかはしける女のもとよりはめやうに
をかしとおもひてつかはしける
むさしのゝかくれにこそもせましかはしくたはまてなきてみ（せや）
おほ人のむかしをわすれすありけれはとおもひ
そしめていひ侍りけれとこたへはしけれとて
三よおもふ女につかはしける
よみ人しらす
関山のみねの杉むらすきゆけとあふみはなほそはるけかりける
おさたゝ卿下ひさしうたよりせてぬるを
こせく侍けれは
思出てかくと逢から山寺のことはよりねんなかなかなり
いまさらのひてはかりおもひさて
ゆくらまぬ物しらそてとすれはつまをおもふ心のと（ほか）
返し
うつゝにもおもはぬ心は夢なれやさてもさすかに物をこそ思（思ひて）
うきまさりけるに大輔か侍けるにつかはしける
茅つ　　小野道風朝臣
限なくおもひ入日のともにのみ西の山へをなかめやるかれ
女この君かとに　　忠房卿下

君か名の立にとかなき身なりせはおほよそ人になしてみましや

返し　女五のみこ

たえぬとこそおもひおもひし白雲はとおもかなたにたちもせす

見くしけとのふたしめてつかはしける

あつたゝの朝臣

けふそへにくれさらめやはとおもへともたへぬは人の心なりけり

道風しのひてまうてきけるにおやきゝ

つけてせいしけれはつかはしける

大輔

いとかくてやみぬるよりは稲妻の光のまにも君をみてしか

大輔かりにまうてこさりけるにさ

つまとれかへりて又のあしたつかはし

ける　朝忠卿

いたつらに立かへりにし白波のなこりに袖のひる時もなし

返し　大輔

何かその袖のぬるらん白浪のなこりありけもみえぬものを

よしみねの卿下りけるにかたらひちかひて

のちに又のあしたにつかはしける

藏内侍

ちかひても猶おもふにはまけにけりたかためおしき命ならねは

さゝめひてまかりけるとおほせられけれハ

道風

なにはのみやに遠よ河のほとりにみしりておほく候さ
りのいとんとてめくりあるきけれとさらにえたち
てむかへりたりけるハかやうにまかりねとひ
いてしけれハ

御心ゆくをおもひし瀬門はいつまてかあさき瀬ならん

返し　大輔

瀬門いかなる瀬より御心きえみえてこそおもひしを

大輔かもとにつかはしける

敦忠朝臣

池のみれいひ出ることのきこけれハ見んてこりをき
なかりしかうしろそへはまきつ

後撰和歌集巻第十二

恋哥四

題しらす　　在原業平朝臣

伊勢の海にあそふあまともなりにしか波かきわけてみるめかつかん

杜祀？下寺之流本以正兼出　写候

返し　　伊勢

おほかたのわかやからくて伊勢の海の波たちぬれ浦によりみえは

つまなしとみえ侍りける人へ

よみ人しらす

ほらしとやいひそへしま白露の人に心はおかしとそ思ふ

題しらす

なき人の心をみるへきに露の命そあしかりける

小野小町かあね

独ぬる時は待るゝ鳥の音もまれにあふ夜はわひしかりけり

女のうらみをこせて侍けれはつかはしける

梅つやふ

空蝉のむなしきからになるまても忘れんと思ふ我ならなくに

あさならぬとゝひたりて忘れしおりと

みしおもしろくしおもえけまへ侍る

つかはしける

よみ人しらす

いつまてかみるらんなき人のことをみる心の秋の世をまつらん

題しらす

うへねの露かゝりなから逢ことゝ秋のよすから思ひけるかな

女のもとにまうてありけるふみをとりてお
けさりけれはゆかりくりてかしこにつかはし
ける　　兼輔朝臣

秋の野の草のたもとしのひしさいはあかれとかきのみ袖そ絶

返し　　よみ人しらす

ふかふつこさそまたの夜のよの草のとこはさらにくやは

梅の見んこにまみえしめけりおもひさふかの

みこなひとりなきしこなりくれにし

清和御子母平卿女　貞数

さゝらすの見んこ秋の草葉におきとまり

人しれす袖そ我袖は秋の草葉におとらぬ

ものひとつの人につゆけし

贈太政大臣

しのひにおもひそめて秋のよにおもひをしける歌つかはし

せうそこはよりけまとかはゆるを

けりあとこれをあひにとひさへと

あかさはなりとうみつらしありけ

世継のすすめ

よみ人しらす

もちすめのへいつまでおもひそ梅のおもひいはいしとまでを

男乃つらくなりゆくころ西れぬりけるまゝに
つゝましけり
ふりやめは袖ふかくぬらしておきてかきつけ世と数か
女のりとしまりてえおもてゆりくけり
なしけり
おそのゝ御まへ世をしろしめす人あれはけさ刀抜かさそ
女よ物いふ男ふたりありきりとひとりゝゆす
もとこさて今むとてつゝしけり
なひくゝありきゝ物をあよ行の世よ西おもとひ給ふ
女のひとりあへさとこさて侍りくきゝ

はなきけるは人のもとへまかり業平の中将をとさはらぬと覚
ぬまゝつゝりきゝ女れおやの伊勢へまかりけ
るはとりふゆかりけるにつゝりきゝ
伊勢をれおまと定なりなはおもしろき花よみてよせ
一條かりといひやりなんとひしきこゆひまやり
それは村上のるをかきそ返りとて

一条

恋しくは来てもなくさめよわかちとせて思ふ恋

返し　伊勢

来られはいゝとも心そ隙とゆくちくらぬけのひとよなり

人のむすめにしのひてかよひ侍けるにつ
けて見て侍けれはせうそこありきける女に

よみ人しらす

人のめに侍けるをも志らすありし世昔ありける秋月とともに
見なれし女に文つかはしけれとかへりことも
それとも思はさりけれはいつかはしける

時鳥なつこそめて忍ひなく声をよそにもきゝて浦哉
人のうへにきゝしめてそゆかりてはとめく

かへしもしきか

夏よりもおきゐるつゝ暁は露さへ袖に物はそまさけ

しのひてまかりてこさける人の家よりいてくる
けるあしたまかりてはとめてつかはしける

あき霧の暁ときゝしはさへ君かよその小よりまさるや

返し

霧をゐぬ表より後のなかめにもいふは君かよそれ世をも
心ともおそひけしとはいりける人のも
とはつらしきか

源英明朝臣
天慶二年卒
右近中将蔵人頭
斉世親王一男母菅丞相女

侍ける女のあさましくてまかりていとひなくなりにけれは恨て
絶之
作哥説不同云々
えくるゝ侍ける女の家にまへまかりあはさりけれ
ときていつらへいてそいひいれて侍けれは

在原むねやな　女也

あふことのなみへとてそ我はぬる月をあはれと思ひしりつつ
もしらす　よみ人しらす

君かゆく雲のかなたに家路山ちかくもゆかん花もちるらし
男のもとにつかはしける

俊子

とふてふことのいかにまもらしさほ姫のさくらもちるらんを
ありしらす　兼茂朝臣のむすめ

かりそめにとはれぬものとしらまし思ひゆるくものかなにかはとまるへき
よみ人しらす

思はんと我をたのめしことの葉は忘草とそ今はなるらし

をとこのやまひよりおこたりてひさしくありてつかはしける

今まてもきえてありつる露の身はおくへき宿のあれはなりけり

返し

ことのはもみな霜枯になりゆくは露のやとりもあらしとそ思ふ

忘をこせく侍る人のもとに

忘れんといひしことにもあらなくにいまは限と思ふものから

かくいふせとおもひけるをたえてはへりける風なとをこせ侍れ

女につかはしける

はら波まかへあつめて浦とこそ世にはいはさしもしるしつゝ遣め
西四条の斎宮（推子内親王）まてこにいりのりし時
心は仍りて思ふ給ふりあひくより歌
宮にさたまり給ひにけれはそのなくるあ
したにかの木の枝にさしてはしをおかせ給
けり
あつたゝの卿
伊勢の海ちひろの浜にひろふとも今は何てふかひかあるへき
あさりれ卿下ころせしそこかよひ
給ける女なりとよりなし今は思ひ忘
れてとかくやてひさしうありけるにそれはしと
女はいひつきてせしそこともをせすなりにき
もてし
亭子院のくら
思ひねといひしかとふかき君なれてとそあはつき杣有らん
色しらす　よめん人さし次
春霧たちなくあちてわかるとも風はらかすは往かさらむや
返し
伊勢
めにみえぬ風に心をたくへつゝやらは霞なれなかせめ
去たりとよりせしそこ給けるやるよは
うつし書る　さかりとのみて
ぬれこそめるん松の元は返はかすき袖やも波はせん

返し　　　　　　　　　　　　　　去た

松山の末こす波のえはたかへは見る袖よりは浪ぞこゆらし

女のもとよりさためなき心ありなとやうさ
つかはしけれは

贈太政大臣

深くこそあつといひしことのはは秋風吹てあはれなりけり

男の心かはりにけれはしるしにありけ
時のおとこのもとにつかはしける扇にかきつけて
つかはしける

よみ人しらす

人をのみうらむるよりは心からこれいまさりし罪と思はん

忍ひたる女のもとにせうそこつかはしけり

これたゝ

足曳の山下しけく行水の流てかくしとゝたのまん

おとこ忘侍にけれは

伊勢

またひとつ時は人知れのほとにいふことを思ふ人なりけれは
おやのまもりける女をいなともせよともいひ
はなてとやこれは

いなせともいひはなたれすうきものは身を心ともせぬよなりけり

男のいふそえまうしてこゝろにもいひて侍
けれとて

よみ人しらす

こともやなからんとやさんとのゝ河原の松のもとをといひやらん
とまれと思男ありて使ありけれは
しのひてかたらひける女のもとに我宿に渡さんと
待つといひける人のひさしうをとつれさりける
からうして使してこそありきつるかなといひ
さらにこそいつはりけれは
年をへていきてかひある我身とはゆかん人のありとしらまし
いと思ひてまかりてこそありける男をせいし
きける人ありきりのたちまちくれはかへりま
うてきてはかなしける

あさりする時そわひしき人しれすなにはの浦にすまふ我身は
云難館にまうてきける女ありけるにのちにつかはしけれは
寛湛法師母
なかめつゝ人まつよひのよふことりいつかたへとかなきかへるらん
しのひたる人に　よみ人しらす
人しれぬたのみこゝろは難波なるあしのうらはもみえすもあらなん
思ひてかよひ侍ける人のひさしくまかりてなきを
のめをさせておほやけつゝひよいせの物にかゝり
つらく侍りまかりてこそくひわひしらす
侍れは　少将内侍

人しれぬ身のなけきてはてなきにさそいそなきそあらん

返し　兼輔朝臣

身をなけはおきける命を長濱の浦にやよりをまつほに

女のもとにつかはしける

よみ人しらず

せきとめへき涙そはやみ涙川はやみて世をたゝよはむ

返し

涙あらん人かよはさし涙川いはあさき瀬をこそこえ

てふかくしてこそ猶はかといふ人のいさは

ふかくしてこそ人はわたるといふなりとも

いかにして鳴くなれは

きて鳴る名をのみそ思ひし夜下ゆふひの心をはゝ

左大臣河原にいてあひてけれは

閑院のおほいこ

たえぬとも何かおもはん涙川なかれまよはせとはなけきを

大輔につかはしける

左大臣

今ははやみ山を出て郭公けちかき声を我にきかせよ

返し

人はいさ深山かくれの郭公ならはぬ里はすみうかるへし　うかりけり

た大臣につかはしける

中務

おほしたらしほとをかくすとていつこにそふらんつきさぬらん

右近にけうそくし遣

た大臣

ことの葉のつきさにふするのとも人めもをしけれは

なきのあさくれ御下心かへんをとくらとて

よみ人しらす

葉竹のおほかるねはかならすをあつうにはるなとかは

こと女に物いふときゝてりくしめの内侍のもと

へつかはしける

よしみつの翁に

めとみえし波の花ちるときは月のおほきにおもふほとは波

遊し

中将内侍

みぬめ人のこゝろせきんおほきにおもひよはてこ今かるきあ

多し

小野道風

よみ人しらす

太くはせとあふ心をおほきの川のきこえを渕とたのまん

なし

よみ人不知

渕とそもたのみしものをやはらかに川のよにてひとしれてふせを

見くしけとの一ぬかにつかはしける

こさうけの朝臣

月のあかゝりしよとしのひすくして女は波乃心をはかりまさへ給ひ
ことゝきそのちに京極の息所にまつりけ
しけり　　　　　　りとよしのみこ
御返しは今はとておなし難波なる身をつくしてもあはむとそ思ふ
心のひてみてけれのていかにかへりけむ
ことさてちくのたちかかはせいし給ひけれは
贈太政大臣延喜九年薨于時敦忠五歳
あつたゝの中納言　雖然信諸本同
いかてこゝえふてふたちこれ人をそ恋てかゝりなん
本院の北のかたに忍ひて女のひとをすまゐ給ひ
ふたゝふたりありてしあさしといひけれは

つかうまつりけり　　　朝忠卿に
かゝるをふいさといそすはしそれ山と谷とをこえん越なる
年ころへてくもらふ人のつまなくのみ給ひれ
ともつゝひとゝ叢りけるてはつかまし
けり　　　　　　ことよしの卿に
くつろふさるまもとらふるを報君さりて花いつくに
人のりとにまゐりけりふかくちりのおもてに
きらふからうしてまもれのりとにまひたせ
てうし寄ゆへやむゆゐねといひてつかり
けるは　　　　よみ人しらす

いさやまた人の心もしら露のおくにもねにも袖のみそひつ

人のもとにまかりけるをあひ見てかへりて又のあしたにいひつかはしける

よるしほのみちくるそらもおもほえすあふことなみにかへるとおもへは

人をとかくいひわつらひて侍りけるかまちとほにのみ侍けれは

数ならぬ身は山のはにあらねともおほくの月をすくしつる哉

ひさしくいひわたり侍るにつれなくのみ侍りけれは

古今躬恒哥也

業平朝臣　他本皆同

たのめつゝあはてとしふる偽にこりぬ心を人はしらなん

返し

伊勢

夏虫のしるしる迷ふ思ひをはこりぬかなしと誰かみさらん

返しもせぬ人につかはしける

よみ人しらす

打侘てよはゝん聲に山彦のこたへぬ山はあらしとそ思ふ

かへし

山彦の聲のまにまにとひゆかはむなしき空にゆきやかへらん

くいひかよはす程よみとせはかりになん侍れは

あら玉の年の三とせはうつせみのむなしきねをやなきてくらさん

読人不知

流出る涙の川のゆくさきはつゐにあふみの海とたのまん
あれはうる日人よけうかりけり
あまてしぬれとぬるゝ我袖のかゝるおもひよかはかぬやなそ
返し
露ハかりぬるらん袖のかわかぬハ宿るおもひのかけやつまるらん
女のもとにまかりあかつきなかりけるへし
あまたしみちとまつかりけり
常よりも涙とふくそ侘つゝあふなりける宵よなて
あまもたかしすまてこそくらし物かたりか
としけり男のかたよりまかるとて女のとこ
くれはなんまうりすきぬかといひあまたハ
ねまほしくもなとせしハ夜川のてひさしにきしぬ京に侍ん
人よ忘れまて侍ける時
数ならぬ身ハうき草と成なむつれなき人よよるへしらし
思ふ事侍ける人のもとにまかりて
夕やみハ道もみえねと旧里ハもとこし駒にまかせてそくる
返し
駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくると思ひけるかな
朝綱朝臣の女にふみなとつかはしけると
女よいとひつきてひさしうありて秋ころ

むしく侍けれは

たゝふみをやりて後今はあふ事も難しと今はなからん
男のかれなそねよと花ことをかひ志りて
侍けるにかの男はあつまへまかるときゝて
きゝて侍りけれは

あふことをなにはさへさく関を逢坂乃関はあふくそよかけりける

返し

関守かいとゝまもりて逢坂乃夕つけ鳥は鳴つゝそ行

又女乃侍りけるもしけれ

行かへりこそもあらなんあふ坂の関よりまさる人をかへせと

返し

ゆく人のありとはきけと逢坂乃関もとゝめぬ我涙かな

かまよきる男は思ひそゆくへくもきこえ侍ると

いひてつかはしける

うらさやくあらは清水と思橋の中くちそともくりあかは

返し

中々にしてゝ人をあさかのつきやくあちれ橋は今とおもへ

志ありける女ともの はまほしき月

ありけるは侍けるをとてあしたにひとりかへりも

とふつるしまる　藤原有好

白雲のみ家をむかしのはなたち出て家を思ひあてさ

女のりとにつかはしける

よそにまと心かりハ春の海をなくとも思ひはかゝらん

よみ人しらず

題しらず

我恋のさゆのまもなく見えこさハおもハぬ歌やりえ海つらん

返し

こゝすのゝあつ思ひハこそけましと身をこゝろれおつ摘そ絶え

又たとく

人まのゝ花のふりゆくやつ天ハのあをそこれハ思ひこそまし

又人し

河よのゝ海をと見るにあつ時まて見えさゝとそやまさりかつ

又たとく

あまけつらんちのゝしして我為ようまつしな

せとハみをしとやまつ

後撰和歌集巻第十四

恋哥六

人のもとにつかはしける　　よみ人しらす

逢ことをよとにありてふみつのもりつらしと君をみつる比哉

返し

みつのもりもるこのころのなかめには恨もあへすよとの川浪

みそかにしのひてこかくよもすから物いひ侍けるに
かくなくあけ侍まてわかれいはまかりかへりて

うれしきは思物からあきれとのあかぬはつき物にそ有ける

女のもとにつかはしける

うらむれと恋ふれと君か世とともにしらすかほにてつれなかるらん

返し

うらむとも恋ともいかゝ雲井よりはるけき人をそらにしるへき

いひかはしてやみにける人によむさしうかは
つまくに文つかはしたりける

しつくにつかれとあり（よし）思ふの中にあるみとはしらさりき

かへし

あつまりうすく数はしけてこそすくなきもひやあるらん

男のまそこそこくすきことのをしられける人

やりて見むとて
くるとみをおもふもおもふもたのまれしと思ひより
返し
おもふもたのめくる日数はいまはとてかくてはかひなき経り
れとこそひさしくなとつまはあはさりけれ
いふへのもんはこやかはきんみのちしとみえてもなか
又
いまへも今をとこのありけるはそらかたをもえてまつを
おとこのそなりけるはまうてをはゆりて
きけるにおもひてのちはいともまかれと

ゆきてこれをなんあけける
たえにし昔の人にみしうら橘と今はもとの主の家
いひおこせよとぬすまぬせりかたとかはせきなりに
けるかはとこの五月ともいふまてこころのを
はひさしうなりつなといひてゆりけるに
三つはく年に里の郭公わかにに一声なきてゆくらん
返しもせす
とふやそてまれならさへとはさるにはそれと逢ひさとにこそ参
物いひけるを女のもとにいひ居りけり
露の命いつとも知らぬ世の中になとてかつらしと思ひせさる

女のかたに御けるをそこにかしこまりける人も
御しはへれは心つきなしとおもひて御ふみ
をことにつかはさゞりけり
かの人のあるかきりはいかにひさしくおそのことそかしこまりける
志のひあへる女なりともなにとかかとこせちに
やりけれは　右大臣
小山田の水ならなくにかくはかりなかれそめては人あはなん
杉とこのまうてこそあかくゆかなれにし秋
おほかたさそこいはゝなかしありけれは
これもこの御時にもしのひ給ひけれ

月にはまつ柱おもひ出るをりはいかなりしをともたゆるお
おもひて人にはきこしけり　よみ人しらす
思ひつゝまたいひそめぬ我恋をおなしこゝろにしらせてしかな
といひやりたまひてやまふにけるをみてひそかにとをす
ひとつかはしいと定なき[illegible]といひそくお
あすか川のみをいひつかはして給けれは
あすか川心のうちになかるれはそこのしからみいつかよとまん
思ひけるか女のかへし
あさよりの朝臣
御しのねをとこそにはしたの今はかうちのかみの嫡なり

返し　よみ人しらす

忘なれ思ふとそこゝろの孫もつといひけれ
いひつしけるとこのおやいと佝ゝり
せいもとこさて女のいひつゝしける
いさゝそとめ池の水に波のうつるに思ふらん
おなし所ま待まつ人の思心待くれといそ
てものひけるといひなかりけれはあるまりくんは
ありふかくそてたとしけり
忘れなは我人忘あはんて君をいひかはふかなは
いうしとはあはれとは人めふかんほとむと

いとく待れたし
あふことのなくてのみふる我恋を人めにかくることのわひしさ
題しらす
夏衣身にはなるとも我為にうすき契はたえすもあらなん
拾遺
いふにてとかくしつゝ河島欲の下にかけはなひかり
思ひて庵まけつ年とふ人そなれあらさりしにうちあけたり
あまたなとつくりけつ女のもと男ありけるに
待けるに清けましき
源そのふ　勤
我宿のぬ人待の江に都出てなかにはかととらみつゝか

そのゝちまくにゝなり給ふけれはとゝめさせ給
身のふえとつかはすとて

よみ人しらす

ふるさとは影のみしてはゝるかまゝにふえとゝめてとあ

菅原のおほいまうちきみの家に侍ける女にかよ
ひ侍ける男なかたえて又とひて侍けれは
すか原やふしみの里のあれしよりかよひし人の跡もたえにき
女のたとことゝいひて侍けるにいつれはえ
きんいへりけれ
千はや振る神にもあらぬ我なれは雲ゐのそらのひかりもなし

返し

千早振神にもなにかたとふらん雲ゐにも人と通て
女三のみこに　あつらしれみて
うき世てふ世にはなしそにかゝるはそこものゝれおもひしそ思
かひよ人のものいふとこそきて

藤原守文

松山に波高きおとそきこゆなる我よりこゆる人はおもはしを
たとこれなりとし西ふく秋のさかひとやりてまひ
けまさところ侍りけれは

よみ人しらす

ゆくとも思ひかけぬなき山のひとつにあれわたるにけるか

返し

わかめのみあまにしかはみなさ山志るとしいひて行てわつさ

女わりなりといひて思ひをひそとなか

めさせてゆく侍けるに

なくさむることもなくすぐ今をとけわたる家の命を

元良のみこのみそかにすみ侍けるまこん

ときかめてこそすなりにけれは

兼茂朝臣女

人しれすまつにねられぬありあけの月にさへこそあさむかれけれ

志のひてすみ侍ける人のもとよりかけ

しきくるまをなむとのせられけれは

りとらく

龍田川色ある紅葉は女のみるにあらはれて思そ

宮の紅葉侍る人にみせそこつりけ

ひとつも行しけるとき

よそ人しらす

このはなく山のよにてゆきにあらはれにける人行かん

返し

女五のみこ

伊勢父母更衣　息子
大納言昇女

みてまの山のすそをよそにてあかなさん時あらしぬるを

つれなかりける人に
たゝみね
恋侘て之ぬてふことはまたなきを世のためしにも成ぬへきかな
をとこありける女をまそいりくれはつかはしける
よみ人しらず
秋されはおくへけるをふよりなほさら波のよるへはなからん
あひよりける女のもとにはいさりけれは
しのひ時にしも秋嵐をなとしてよはにあたる浪よるらん
女のもとにまかりそめてあしたに
在原なりけりと
落葉
あはせて枕のうへに別にし暁ちるをみてしかな
なとゝれともえすなりにけれは
よみ人しらず
暮もえすなりも限ある山ち越てふるのまたく逢て
返し
こえぬてふ名をとかくみそすくる山いくはちかくあらんと思
女に物いはんとてまかりけれとしゝ人に
物いひけれはかへりて
秋為よりはつらしとみし山末なかりとも思ふぬの逢し
かへし

あてなる男とはしかく恋をとて歌よりつむ人よ数は
人につかうまつる　戒仙法師
鵜とは驚かれけとも人ふわたしのゆくえをかれ
こそ思ひひける人のあかりてむまかりなま
けもとちるいはえならすして
よき人おほす
中ちりてつくさとみるはけも尤それは捨は恋されは
女のりとにつかうしけり
藤原さねて
流しなるとひ深川かとりふは名やま所かへもむ時あく

返し　よみ人しらす
流てはおくふかなくて深川のなかれもとそまれ
男のりとまり花さかりふらんといひてこ
ゆつまけれは
花さかりすきし人は流しきれともをさへてやまん
おとこひ流しうとはさりけれは
右近
とふことをまつに月日はこゆるきの磯にや出て今はうらみん
あひしりて侍ける人のりとにひさしうまから
ならすなりにけれは三条なる所とてあよとよひ

ハやいふことゝいひつかハしけれハ

よミ人しらす

玉のをとゝめしみかくもおもてやもろてたゆミし

返し

うれしきの思ひけさやとよハ玉のをくたゆミし秋そ悲しき

女ともろともに侍て

みすのうちぬ思ひ出よわか袖とたきにあれんちへそまれ

よへし

なきなにもさをしひしてつまハ秋よいくらをおもしとそ宗

元良のみこ 陽成第三 天延四年薨七十六

長一

みこ小夜のはしそくしてなくるとて

そへありける

南院式部卿のみこのむすめ 貞保式卩　清和第四母二条后延長二薨

わかやとゝてこゝろそらまれ夜をあかしくさとはみなみなさすき

ひとしらとかさりける人の思ひいそくあらひ

ましてこんとさしておひまそとやて行く

こさりけれハ　よみ人しらす

八重葎さして門とさし又よ侍ふ色くおもてこん

人とはひさて色くと人はなひ侍くのち

いそなりきんもしめれ人の思ひくりておと

つふけれとぬくハやらすして扇よたちはと

わくかさしろふつまてはらりけり

源廣明卿

さそひ(し)春なる恋をしるみの松のえに小松さてもいきなん

よみ人しらず

返し

ほとしるの恋なかにさしこしは春なき附の夢にそ有ける

みる人よえあひ終して三世よ(き)れは

せきもあへぬ波の月の世をそやかならん根もとひやせ

読人しらず

世をそやと思ひけりものあはれも絶まぬ頃は恋にそ有け

在五中将

こゝろもあはまなる月は忘草恋よさへやあひ見けらん

世中のうれはなへてもかりそめをたのむ限りそうらみ成

あめのめくりけるに人へ

夕暮としひとつまきれ結人のこむやとに庭そ定まりけれ八

女よつかひける　源よしの卿

いとまそてうちとちぬ山いつしかねよ思ひそ有けり

読人しらず　よみ人しらず　又

今宵あかね秋月はなかなかものかへのうちのそて下におく

白雲の絶へさき山はさくらちてもふくこ風はさそふらん

世中にあふと立のの月なくてやはいつかふるとてねしるか

ほとまもいかゝりと女のいひかけゝるに

つかひける

贈太政大臣

在原第三　流本同

あまの川をゆくともむかしはふちせにかはるとなとからん

ひかしのゆかりかよにすなかりしもふかれは十月

斗よ雪れをとこしはりもつかしこにいひ給

けり

右近

月をつめは義とそ思ふ川宮のふりあかことを非に逢

源さねあきらの朝臣十月斗にとこなつを（忠明　天暦五年　参議　従四位　是忠親王子）

おりてさくらく給けるとて

よみ人しらす

冬なれと君かかきねに咲ぬれはむへとこなつに恋しかりけり

女のこむすめとおりておやかりこにまかる海

つそ給けるに雪のふかくふりて給けるはあ

しこに女のむかへにこなつかはしけるを

そこにくるへきかはりけり

たゝもとの朝臣

白雪のけさはつもれる思ひかなあはてふる夜の程もへなくに

返し　よみ人しらす

白雪のつもる思ひもたのまれす春よりのちはあらしと思へは

かくて給女をやりけれはいかにといふ人

ふく給けるに雪のふかくふりけるに

故式部卿のかはりたりけるを雪をまつ

返し

山ちかくしせぬ宮のうちはさはまつ人にかけてこそみれ

物いひ侍ける女にをそれてかくれ侍けれは

そうしける　藤原これもち　内侍

あら玉の年はふれともふかくのみおもひ入にし山を

我やわすれん

後撰和歌集巻第十五

雑一

仁和のみかと嵯峨の御時の例にてせり川

に行幸したまひける日

或記云二年十二月十四日寅刻行幸芹河野用鷹鶴也将補之儀一依承和故事或説随古老口傳如此記大非嵯峨例

在原行平朝臣

仁和二年十二月十四日行幸　三年四月十三日致仕　寛平五年薨年七十七

さかの山みゆきたえにしせり川の

千世のふるみちあとはありけり

おなし日たかゝひにてかりきぬのたもとに

つるのかたをぬひてかきつけゝる

おきなさひ人なとかめそかり衣けふはかりとそたつも鳴なる

行幸の又の日なん致仕の表たてまつりける

紀友則またつかさたまはらさりける時ことの
ついて侍りて年はいくつはかりにかなりぬるとゝ
ひ侍りけれは四十余になんなりぬるとまうしけれは

贈太政大臣

今まてになとかは花のさかすして四十とせあまり年きりはする

返し　とものり

はるゝの数は忘れすありなから花さかぬ木をなにゝうゑけん

おほやけにかしこまりありて殿上おり
て侍りける時よまけの部下なりける人にをくり
侍りける

平中興

世の中に常へふりてへをりのみかと雲林院のみこに侍
まうし后になりてみまいれる時さふらひて御前
なるそのきゝ給ひてさなりけれは時々と
ゝさまさしに立のひてそちよりまたまいりまゝ
に侍るはめんはなくてなくさめり給ひける

檀林后　嘉智子仁明母后嘉祥三年崩年五

ことしけしゝはしはたてれよひのまにおけらん露は出てはらはん

家にゆきひらの朝臣まうてきたりけるに月の
おもしろかりけるに酒なとたうへてまかり
たゝんとしけるほとに　河原左大臣

照月をまさきのつなによりかけてあかすわかるゝ人をつなかん

返し　業平朝臣

限なき思ひのつなのなくハこそまさきのかつらよりもなやまめ

世中を思ひうして侍けるころ

業平朝臣

住わひぬ今ハ限と山里につま木こるへき宿りもとめてん

我をとこ志りはなれかいひそと女のいひて侍ける

返すよ　とつ孫

足曳の山におひたる志らかしの志らしな人を朽木なりとも

をとこおやしける人乃もとよりいひけれハ

伊せ乃海乃浦てのうをなるはまなれと深さ心ハ底よりそある

おほきおほいまうちきみ白河乃家よ
まかり渡りて侍ける人のもとよりおこせて
侍て

中務

白河の滝のいとみまほしけれとみたりに人ハよせしものをや

返し　貞信公

志ら川の滝乃いとなみみたれつゝよるをそ人ハまつといふなる

これもいとよりて

よみ人しらす

菫菜乃思ひふそ人ハ忘るらん世よハ忘艸の中におひて

相坂の関に庵室をつくりてすみ侍けるに
行かふ人を見て　蝉丸

是やこの行も帰るも別つゝしるもしらぬもあふ坂のせき

さためたる男もなくて物思侍けるころ
小野小町

あまのすむ浦こく舟のかちをなみ世をうみわたる我そかなしき

あひしりて侍ける女のもとにまかりて
侍けれは人の心にかはりつゝ侍けれは
ふみをなとしもやすらのいとまとやつらん
しかりけるとよみてつかはせとせよと侍けれは

よみ人不知

濱千鳥ひなるへきありつまてかれ人のかゝりはなさきを枕

法皇てらめくりし給ひけるみちにてくらゑ
てのえらいとおりて　素性法師

このみゆき千とせへても見てしかなかゝる山ふし時にあふへく

（正子）西院の后（淳和后嵯峨皇女）御くしおろさせ給ひておこなはせ
給ける時かの院のなかしまの松をけつり
てかきつけ侍ける

音にきく松か浦しまけふそみるむへも心あるあまはすみけり

敦院のみかそれの垣下に厳とみへてあるまし

てあかつきはてゝまかりけるにつかはしける

右衛門

秋の野ハ笹をわけぬ曉よわきそてもおける袖の露哉

志らかなる人の心そみなつくしつゝ(?)

うこん

志ぬとにふかくてもかゝる世中にいかてあへるたまなれは(?)

ひとつもこひよつゐつかしあかにかゝるあんなき

それハこさしとやいかにひとつまもハ

藤原元輔 天暦五年左少将天徳三中将天禄三参議治卅(?) 右大臣顕忠子天延元卒

住吉の岸ともいはしおきつ波猶うちかけようらはなくとも

法皇そむしめておりゐ給ひてや

みこし給ひてことさきとゝしめて

まかりて女御更衣たちひとつよきすくひ

給けり三条の御とふよろん見れはひたりまは

ありきし昔とおもふていとおかしきや

給けりつゝくに 七条后 温子 昭宣公二女 寛平九年為皇后 延喜七 崩卅六

ことの葉にたえせぬ露ハおくらんや昔おほゆるまとゐしたれハ

御返し 伊勢

海とのみまとゐの中ハなりぬめりそれなからあらぬ影のみゆれハ

志のひてかよひける人の志りつ

くまかりといふ侍なり大伴黒主そこにまて
こゝのみかに心をつくしてよひあかしまうけ
まかりしへいそくゝあまりしにあへ
きゝわたるのあれしふるさつけてかへしにつく
つかはしける　　　　くろぬし
何せんにへたのみるめを思ひけんおきつ玉もをかつく身にして
月乃おもしろかりけるを見て
　　　　さね
あたらよや見んそ侍る月影とのみいふとやいふ人の
五節のまひひめそりしめしとめ侍

ともあらしと思ひけるとなむしるしさへまけ
たり　　　　在原滋春かむすめ
くやしくそあまつ乙女となりにける雲路たつぬる人もなきよに
太政大臣のたかゝりしすまひのちりあり
し侍ける日中将にて侍りてことあり
てこれかれあるしけるにやむことなき
人二三人はかりとゝめてまらうとあるしさけあま
たゝひのちゑひにのりてこのかみのへと
かけつゝかくに　　　兼輔朝臣
人のおやのこゝろはやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬるかな

女ともちなりけるにつかはしけるさしてと心さ
しとて　大江玉淵朝臣女

難波にすみ侍りけるをはしふさんのもとにはりそ
陽成第二皇子式部卿 天延二年薨七十六
元長のみこにすみ侍りける時てまさくりに
なにいれて侍りけるをこかねありきんさを
ひとつくゆひて又こむ時にかへんとてのみ
延木中子 母女御和子
よりしをきていく侍りけるほとにあさみ
仁和源氏四品 天慶六年薨
みこふりくされて月ひさしく侍てあり
しあまうつりてこのまことさるなるのみ
こふをくるとて　中務

あまてふたつにわかれんみつのえの浦をまよひ子を思ひやりて
忠房朝臣津のかみにて新司むかへかつらう
まうけに屏風てうしてかの国のなあるところ
ゑかゝせてさいはひとふ所よみまいりける
たゝみね

よそにふかくたにせぬさいはひの玉をとりてそことゝゝむ
兼輔朝臣宰相中将より中納言になりて
又のとしのりゆきれうこれあるに
ぬりてこれをもちひのふつのことに
兼輔朝臣
延長五年任中納言 延長上臈五人
八年兼右衛門督

そのみかれむハことゝけまてこえハ昔のやうとうしおほえ
あからのまいりし人の住そのありやう
てきこしれハら兼輔朝臣のいひおこせたる
まて　とて○
ありさてもしも人ハむかへて老よにけれ雲のうへにてみむ
人のむすめに源のねさうたえみ侍けるを女の
母きゝて侍そいみしう世にし侍れハ志のひ
あかくしおふせてひけるおもひしにたし
らすして母ハいにいさゝ人ハ孫さらむけて
はゝりにけるハいつちなしける

女のもと

小一条のおとゝにことにはとしをとりてこまにて定方
三条右大臣身まかりてあくるとしの春大
承平二年八月四日薨　同三年二月十三日仲平任右大臣左大将如元
臣めしありとこさて敦実のみこにつけ
けり　むすめの女御　仁善子　左大下女
いそのかみきこりも世の色○ともおほしきる宿にてみなく
女御たちのおほしまつりてきさいにあひ
けりとこさて侍りしきる
敦実の御子　菓子　延木同母
去とし給てうれしき年のありしも世をとりとての○ハおひねとなさく

康明親王中納言になり侍りける時うへのき
ぬつかはすとて　　右大臣

よろこびや重ぬる衣をかさねつゝ紫の色とこそ見ん

返し　　康明親王
天暦五年四月任中納言従三位　初叙三位時着大臣袍流例也

いまよりも契てきりふるからにさらにぞ立かさねぬる衣
ゆきさむからぬひまをとりたるくく　大輔
かりとへもてこそありけれ

大輔

春の日の数の初よりなにはつのこともみなかさね

返し　　雅正

ゆりぬとて忍ひも捨しとき衣よそへてかやかな頼そする

世中はそらかなしや是はゆくされのりしかる身のいかくら何をかあつましと人の

中納言侍りける時　　大江千里

流ての世をもたのまず水の上の泡にふこさへ浮名と思へば

藤原さたゝ木の花人よりかしよりありけるほ
つまてあす殿上侍りありむしけるほ
さけくるへきのつかはし　　兼輔朝臣

むかし見しひかりぞあけ衣かけけるは人をよそなる

法皇御くしおろし給ひてのちに

七条后 温子

今はとてしくるるさへそなほはかなき袖と身のなけき（ふかく）

御返し　伊勢

海とみは淵の中にあれはやあまれる袖よあやまたるらん

京極のみやすん所あまになりて戒うけんとて仁和寺にまかりて侍けるは

あつみのみこ　式部卿 寛平廿八 天暦四年出家 康保四年薨

法のことはしめてはしめと侍りしことかはりけるをといふみのん

女のあつかなりといひけれは

あさつなの卿

ゆめあるれはあさなゆふなにたつ浪よる白波をぬれまさるらん（そて）

おもひつつひける人の家に松の梢のみち

しらけれは　よみ人しらす

年をへてすむへきやとはみれはなる松の梢も色かはりけり

男の女に婿をとりけりとかくしてそのめに

かきつけゝる　四条御息所女

身をそむけ人の心のうき楊をあやうきまてもあはれみつゝ

小野好古卿下野の国にてかはりのひとの

かりて二年といふとし四位にかなり次まかり

なるへかりけるを時にあたりてさされにけるかなれから
ゆるすにもさされにけるものやすから
ぬよしとうれへをくりて侍ける文のかへ
事のうらにかきつけてつかはしける
源公忠朝臣

玉匣二とせあはぬ君か身をあけなからやはあらんと思し

返し
小野好古朝臣
伊予国海賊純友追討也

天慶元年正月右少将　二年正五下
四年五月二日従四位下　今年正月叙
天暦元年参議六十大弐如元四年正大弐　天徳二年左大弁四年又任大弐
康保四年　致仕八十五

あけなから年ふることは玉匣身のいたつらになれはなりけり

後撰和歌集巻第十六

雑歌二

事ありて前太政大臣によせて侍
けり
在原業平朝臣

あめのまれぬらん世中を歎て見けふにおほかる月をいふにまかせん

やまひし侍てあるをきの閑さるにこもりて侍
けるにまへのみちより閑院のこ君山にまう
てきうとあやしきなんおもひかるとの
つけ侍れしおもひてつかはしける
としゆきの朝臣

お枝のほりにつきて侍る人とさてとらめすそ給はさりけり

前中務宣旨贈太政大臣の家よりま
かり出てあかつきの露にとふにまかりてひ
さしくやすむとなん侍りける

宣旨

忍ふ山もろこしまてゆかむ人も越の声を忘れしとさきをも

返し

贈太政大臣

日くらしの声を忘れしけふよりはみ山とかりにやとるとは

河原にいてて見よとかへし侍りけるにおなしきまう

ちさるといひておひつき侍りけれと

あつ忠の朝臣の母

ちる道のほとりの河原に駒をとめて見つつへん
人の年をへて侍りけるに志に侍りけれはまう
てしけり

閑院のこ

わかのほととしとやことにふくらん草葉よりうつ露の色は

延喜御時賀茂臨時祭の日御前にてさかつきとりて

三条右大臣

かくてのみやむへきものかちはやふるかもの社のよろつ世をみん

枇杷左大臣　于時中納言春宮大夫

たゝしこの時さらのいは木のなをりし

みく

延喜十七年閏十月十九日章北野
野よみうしとうよふ器あり

見らむとてその世にはうきさくらのこゝろをさへ絶えなん
戒仙かふかき山寺にこもりゐけるに法
師まゐりてさくらの枝にむすひつけて詠
けるに　よみ人しらす
いつまてか雲とも分ん山ふかみまつの波もふかはにかゝる
これを見ておもひくまとすれは物思して　つとめ
てをくり詠ける　藤原於範
花ひまなきゆへ物そとかるけさ志をたさて給ふにさらん
わかし詠ける時は志つかにまこよ歯して守るを
年おひてはまいり詠しはへりけるにさいり

詠て　よみ人しらす
めつらしや昔なからの山の井はしつめる影そくちはてにける
宇治のおもしろきよしを人の詠けるをはまゐりて
つかはしける　大江興俊
うち川の波にみなれし君ませは我もあしろによりぬへき哉
院の御ともにうちにおはしまし時人に
扇てうせけるを詠ひけるを見てまゐるとて
小式部のめのと
吹出る根ことに露のやとりせは秋風はいかてなかるし
返し　大輔

かくて後またに吹つる嵐風と山おろしにはなさしとそ思

男の女ともかへしそこいひけれハ

よみ人しらす

ありなれてたゝかん人をみて少ゆにおもふらむとそ思

かくのみのほとそうこゆとてよミ侍ける

亭子院にはへりける御息所たち人

昔よりしてまれ山とといひけるハわかことく人をよるやこえなん

おとこにつきそみちの国むさしのめとつくに

ありけつそのおとこくにかりにけるを女

かくしておやのいひつかしけれと

よみ人しらす

雲ゐちかくなりにけるかな程のそらにいかなる風の吹てつけゝん

返し　女のもと

あま雲のはるかなりとも程そらにかせんそなれぬは

西まほりふかくつゝねことひくへしされは

それみまよりてはへりけり

りとうしのかんて

やまとハかしこき人よみにえしなくとも程に雲れ

延喜御時御むまをつかはしてそやうへまいる

つきよりしおかせけるそくしありけれハもとる

はちまかりておほせらるゝまゝにまかる人は
つかはしける　　素性法師
ありち月の頃よりそく出つまいかとらくそ山にて
つ
やまひして心ほそしとて大輔にはけるは
しきつ　　藤原敦敏

清少納言云一男母醍醐天皇皇女下女
天慶六年左少将蔵人
九年十一月正五位下天暦元年卅

清章
宮少将下去
不知其他

万代と契しことのいたつらに人わらへにもなりぬへきかな
返し　　大輔
なきていへはゆしゝき猫と万代と契しとやかはなるゝさき
わかまみのあるとそそにかけてこそえけるを海
のかよりかく　　よみ人不知

ちるとみて袖にうくれとたまらぬはあれたる浪の花にそありける
あるところの童は女五節みんに南殿にさふらひ
てくれとらしかひくたりけむの卿下蔵
人そこなるとうしてあまたとうへまとして
立かへり涙まと合てふあさきておきわかれしつゆそわすれん
返し　　輔臣朝臣
ゆきておきわかれしつゆとこそは庭のみなあさ我からせよ
人のうへとぬれせ給ふにぬるゝつらすやと
て　　よみ人しらす
浪るゝ思ひはけくそこのこれよりやいつかたんとまそらん

男のやまひしけるをとふらはてありありて
をこたりてふとまうてきたれは

思ひおきてとふよのほとに重き峰の月の白雲となりなまし
見んそかれとこそおもひしか女をおくりはそてとへ
とりのをもいはしめさりけれは

忘れなんと思ふ心のつくからにやはゆかさ
ありしよりけにまつそこひしき

くれなゐのあさ(?)のあはれをもとめもやて思ひなん
世中とをく思ひつゝひ給けるにまた女もまた

ちかき人物いひけるをかさねてとふ
らひ給けれは

人はいさやわすれ波あるきれいよりあさき心そみえゆかさ
いくとせのむかしと何の人いふとえて

高津内親王 桓武皇女

なをき木にまかれる枝もあるものをけをふききすをいふかわりなさ

見しよにあてさつり給ひけれ

[illegible]

うちぬくのふにあまされはちらむまておもふと
これ見と女のりとはまりて物いひなとし

けふは世のあふさかむれやとや老れなし

よみ人しらす

玉されのおとめまよひ吹風のさむくはなくてまん思と

男の袖いひけると返りきけれはかへりてか

しなふつかはしける

白波のたちかへるなかしは身をとしかなそ袖はぬれは

返し

よりともたちかへる波は波よおやなく何の袖のぬれん

題しらす

たちまちにたのまはさらん身にちかへ桜の実ともありといふ

ともすらの久しくあはさりけるに侍る

つてあひてよみ侍ける

かゝみにゆきみちもしそれは返となかくらまに恋心そ

題しらす

いかなれは梅かいとのみまれ来ん恋をそふまて来しとはや

人のめにみえはひけるにこそつらまてく

賀朝法師　内導師也

身なくとも人にしられし世中にしられぬ山をしるよしもかな

返し

りしのたとこ

世中にしられぬ山に身なくとも谷の心やいはてみるらん

山乃井のこゝみにつかはしける

よみ人しらず

あにのこゝろてハやまあさくともいさ浪こえん山の井のみ

やまひしけるとからうしてをこたりて

つとめて

よその山あなたにもあれなん世中にあふかたのあらん

題しらず

数ならぬ身をとりちかへて吉野山高き歎を思ひおこせよ

返し

吉野山こえんことこそかたからめこん歎のかすハしりなん

陽成院のみかとの時しのひてまいりけるに世(?)

けるとひさしうめしなかりけれハよみてまつ

りける

武蔵 けうとものみこのむすめに侍ける

数ならぬ身におくよひの白玉ハ光みてこそ物にそ有ける

ありかよひける女の心とけさるのきゝて侍る

ましハ年月ハへたてとハへいかにしもとひつ

かはしけれハ　よみ人しらす

なにかそのみさかの道の老の世に恋そするてふ人のこゝろを

女のもとより恋なとせさせ侍けるかへりに

忘るとハ恋しからんと道まかれとふ山の志をかりみちを

むかしおなし所に宮仕へしける女の男
につきて人の国におちゐてありけるをとこさて
はるかに心ありける人のもとよりいひつかはしける
世をわひ人めまれなる山里に家ゐせんとは思ひきや君

返し

身をうしと人しれぬ世を尋来し雲の八重たつ山にやはあらぬ

男なと侍らすしてとしころ山里にこもり侍
ける女をむかしあひしりて侍ける人みち
まかりけるついてにひさしうきこえさりつる
ところになんときゝてとひまうて侍りければ

云た

ありけよ世のうきことゝを思ひつゝなかめ世をはたれにかあり
山里に侍けるにむかしあひしりて侍る人のいひ
よりこてふはむそとゝいひけれは

閑院

春やこし秋やゆきけんおほつかな陰の朽木と世をすくす身は

題しらす　　としゆき

世中はいさともいさや風の音は秋に秋そふ心ちこそすれ

よみ人しらす

武蔵野や袖ひつはかりわけしかと若紫はたつねわひにき

いと久しくこもりゐて侍けるころ人のもとよりす
侍られけれ　　　壬生忠峯
おほあらきの森の草とやなりにけんかりにたにきて問人のなき
かつてよ年つかへ侍ける女のおとこかあち
けるかりとまりかの里からはそこにあんなる
なりとふかく来ていかなるたよりしみく侍られけれ
よみ人しらす
あはれてふことそうたてなほや人をとふらん
題しらす　　伊勢
吹風のしたのちりにもあらなくにさもたちやすき我名なるかな

かもにまうてゝきたる夜よ中河のかたより
まかりけるをよりける女車にあひて侍けるをと
これかれかさなりよりみえわかれにけれはお
ひとりて侍ける女の心にしふく思ひける
らそく侍らす侍てあひ見て六七度そ
ありふなり侍ふける女よ侍られはかの車に
いひ遣侍ける　　閑院左大臣
都ての中河の水ふを移して逢瀬はなほ遠かりけり
枇杷左大臣ようし侍てなしのたてとりあ侍
けまいらりあひたりて侍ける家のかたに

ゆるしありけれは

俊子

我宿をいつかは君かならしかほにはおりにおこする

返し　枇杷左大臣

なら葉の葉もりの神のましけるをしらてそ折したゝりなさるな

ともあらはれりにはまかりて帰るさあまた

さるひよなりふれはまてゆかりけると

とゝめまうひてりく給けるふみをとり

とゝめて又のあしたふみつかはしける

よみ人しらす

ゆきては都やあからん笛竹のつき二よのことゝいへは

返し

一夜にも惜みてそ笛竹のふしからもちも思心あり

りとよりなからに給けまは要くよなひ

くてひて兼輔朝臣の家よみつきをとれ

こへりを給きるにそのみつきにくるてつ

ゆきよをかりけれ　ことを

今はゆくあらたまのかはのこれ森の下なる葉はあらは

兼忠朝臣母身まかりにけれは兼忠をは故

枇杷左大臣の家にむかへとらせはへるの女

よはふハせんとおもひさためてかへりける
まつ枇杷の家にまうてしをくりとてくる人
て侍ける
惟忠朝臣母のめのと
惟忠未詳 浅忠中ヽ貞元親王子 母昭宣公女
独なきさるそれたふかなく世ハ終よ思ふの華をつまし
りのおひ侍けるはやむしとおもひたる前より
と世説へりなれハ　よみ人しらす
姥こゝもとも心えひとつてわりなるりのはかなきにあり
世中の心よりなかぬるすかけりつてよ
伊勢 中
行かて後さ独ハ月おほゆる世をむつ人方をそすれハ
とふと侍けるころ人につかはしける
よみ人不知
思出る時そかなしき世中ハ空行雲のはてを見つれハ
題しらす
哀ともうしともいはしかけろふのあるかなきかにけぬる世なれハ
わすれてふことなくさむ世中となりし昔といひてしのはん
あるままに国にたちぬときゝてなかりける
こさ家ゆちて侍けると京にまかりてきたりけるに
てひとりかへりてそのゆくへに侍ける
人はいひつかはしける

物思ふと行てもみねはたかさこのをのへは海や松やなるらん

延長乃御時に後の蔵人ありけれはそうしけりせよとおほしくてつかうまつりける

兄乃孫

淺ふかくなりもてゆけともみなかみのおもひしふかさよりは猶まさらさりけり

後撰和歌集巻第十七

雑三

いそのかみといふ寺にまうてて日のくれにけれは夜あけてまかりかへらんとてとゝまりてこの寺に遍昭侍りと人のつけ侍りけれはものいひ心みんとていひ侍りける

小野小町

いはのうへに旅ねをすれはいとさむし苔の衣をわれにかさなん

返し

遍昭

世をそむく苔の衣はたゝひとへかさねはうとしいさふたりねん

法皇みゆきし給ひけるにのちくいかとそれた
とへくもしやうかをおもすなりは
それはさきのに給てあくまつるせけつ
せうねいこさみ

逢ことのたえさりしあひけさふにゆめの数なるぬ猶そ有
けり女のりとうりあさにこころゆつしとおもひそ
給けまし
た大臣
あはれをなさまほしすまあて秋月のよるこそなかれ
けりしらす
よし人のしつ次
家人となりぬかきさ安部花山院よりあまた出そ給
ひこまりて給そさしに給けるを思ひて
ゆくしかまつりけるをおほしまうちきみ
のなさるをとも世ぬあとうらみ給けまい
大輔
秋月をあかねさす君かたはたのもしと数やたのまん
人のむそめふかれあらく給そ
よみ人しらす
世中をたのすかうも河の瀬なるふかきあら瀬ぬそ給
なきなれそうち給けつれ
よこのふらぬ道をねとなりる瀬のこすなかり

前坊おはしまさすなりての比五節の師の
もとにつかはしける　大輔
うきれけと過こさぬともさらに我さへや人の思はさらん
返し　よみ人しらず
かなしさもうれしさもしらはひとつなるを非とわかちて思はまし
大輔かもとにしのひつゝかよひけるを親聞付て
しけれは文をとりてたてまつりけれはつかはし
ける　大輔
あしかねの物かなくに足曳の山ふところに人を有り
へし　敦忠朝臣
しらにの宮を消ゑし足曳の山路をかねに御子の
いひちきりてのちとしつきなとありて
よみ人しらず
ふるさとのあれぬ物にすまはせは後にしとしもかはらさりけり
よみ人しらず　伊勢
面影をみし数よりかそふ時はのちそしのふめる
しらさりける女をとかく
ねさとあねのみのはちりてはやくもつふけるか枝となるらん
よみ人しらず
浪千すにかゝぬ身なれは住吉の岸にとふらすかやそふらん

時さとせむとて紅葉の枝をおらせてあらしのふきとふらえ
いと志のひてかくしひける女のもとにつかはし
ける　梅さくともしらすあしてたとしありけり
ときつきくはかりしきか
鳴くなる秋風にに河の辺かくなみをもて置
むかしおなし所に宮つかへしける人年
比いかにそありしといひおこせたりけれはつかは
しける　　伊勢
身はかくてさはかのをと数はさとさしせぬ梅はくなるとかり
そうかしれなくにいつかへとおりきて

おしぬはさしにかんして待けれは
よみ人しらす
むかしさいわい世の中にさ会ひける雲なれはそこはかと
女のいとくるしく待けるをおもひわつらひけり
かくてむかしつまぬときさて男のありける
秋風にこゑをほにしらせたのみておもふときそ
くちなしあはむときまつかしきて
いつのいとかはしけれは
相にまていつと志たちはし人のをとは秋風すさまし（とり）
よみ人しらす

はつれ〳〵やうぬなそ逢つゝみ侍ともかくさんと思ふ
人のもとにみつらしけり男人〳〵よ見んとけ
ふるとこそて侍らさりし者ら
見ゑ人よ姉みをたりかみなせ川その瀬そまつおさ(れ)
筑しの志らかはといふ所にすみ侍けるに
大武藤原おき(興)のり(範)のあそんのまかりわたる
ついてに水たへむとてうちよりてこひ
侍けれは水をもていてゝよみ侍ける
ひかきの嫗　筑前国人
年ふれは我くろかみも志ら川のみつはくむまて老にけるかな

うしふなるゝとこのむ女になん侍ける
志そく有り侍ける女乃男ふかゝらすなりて侍
ことなき人よいひつけといひ侍けれは
侍ら中務
かはすとも色なるたちなんなきりんともふり逢夢風や
題しらす
ゆくる夜はそけさは海にふかんこれはあさぢふむなきそめ
女乃もとにみつゝりけるをたゐるもせさし
てのちくいふ文をかへりせくとりなんそくと
人乃つまなりけるは　よみ人しらす

大空に行かふ雲ちさへ人の心みゆりのこなたか
このかきに侍けり男はまゐりかよひすなり
まけるはこの花とこのあはりとにてまうてへと
こせく侍られいとくるしさすられといひた
りしかりけるをこなたに
このかみなかくはのひさしはおはしけれやよのいふらひなとときこゆ
ものみ侍けり女房つかへし侍きらとともなち
なりけり女ありかしくる所まてつゆきいらぬ家ふ
ゐりてきこえかわしきしらめいらへと
ふかうしせんとてまうりありて侍きらかとに

の女をとらへひけて侍られは志のひてくる所よ
いまし侍けり　法しゆき
彼よみそねましつる橋と吹風乃あたりし遙さおまえ納 舟
男乃橋よ渡りて嫁とせいらり育てま
らてさそりけるをかくへく彼よまとなりしひ
ふと人はなそらへとさゝしは渡しとあらきをりを
いそりけるは　よみ人志らす

天慶元年十一月
五日薨寸五
干時右大臣
権中納言兼右衛門督
判官

みとりなる松ほとすきはいかてかは下葉はかりも紅葉せさらん
故女四乃みこ（勤子 延木母更衣周子）のゝちはきさいせんとてかくいひし
のまゝにをなん右大臣のとめ給しときゝて

とふすゝきとてたちかへり侍けり

真延法師

東方王升宝内釈王六脱葉頂容止可観先帝鐘愛親教敷筆之妙得音韻之叙品

思出の猿やまさかおれる人のかけにまちわひつゝみてしをしむ

返し

左大臣

なきわたるの月影てらしおりとみるかそねもほけり

きこゆるかめとも侍すひとりねしそのこ

もと女とりもちありとりまつ事てく

侍けるに

よみ人しらす

そこはかと月をもたのみしに猿の郎もふるとこそ

前栽のなかにまきの本おひて侍とこそて

ゆきあきてれあるてありとりのひともあひ

まつりしまちへは今へてたちかへりけり

真延法師

色深きよそとも心もなしねかはくはのみ本末なり

返し

源明のあそん

山深み跡はかはらぬ本をみなれとそ思ひける

大井なる所にて人々歌よみ侍りけるに

てけり

なりけるの郎下

大井川ふるき流れをたつね来て嵐の山のもみちをそ見る

題しらす

よみ人しらす

あまの川秋ひとつのふちせかはりてくれ世をも恨つるかな

思ふ事侍けるころ志賀よ詣して

世中をいとひそくにつゝとも紀みなれはうちそうれけり

ちてたて侍きる人のむまめ小三のひてうけひ

侍けるとき つまくかしをくれ侍りける月

見てくれたりけましと為ふりてえまうり

いそ侍しそこまかめそ侍けるとちてたくさて

つまくいくはせんとそゆうまよしいひて侍れ

下よのさひ海つあのねなまてき夜よほうかるか

人の歌よ侍り為りきうふやりあにたさき

いとなりしありしれいにくりてつかうしける

御つきに非皇とさりきんおもちせしに秋ひとつき

法皇よしめて為さなしらんしけりはとして

なの中に絶りつゝらんみそしめて山為ひゆくまに藤原ゆき

源昇卿 左大臣融二男大納言正三 延喜十八年薨

法皇御製

家乃御むへもみ宮ふおひてきこえつれつまてあの玉ひけん

山桜くしたしめけつ時

僧正遍昭

今来よ哉いひしたし為れてまへとさきすぬとうてて今

題しらす　よみ人しらす

瀧つせにかくれにあられと鶏の世ふかきあけ
そしめくらしわかし待まつ時のふ
きさつきも待けり　遍昭

あらためかれにもむかしのまゝさとおもひや
みちのみのくにゆかりてまつりけるかり　まん
あけくまれ松のまへて侍けるとそこに松
とこへ侍るせ侍て侍そくのちよおもし世よ
ゆかりなりてのゆきされ侍よりも松とみ侍
藤原もとよし（元善）の朝臣

ちも時やしまへあけくまれ松とこそひあひゆか
ゆみしとふかふくそのん絶これまよ
みけるに　よみ人しらす

菅原や伏見のくれにみわたせは霞にまかふをはつせの山

題しらす

ことゝもなくてつれなき月よりのあひたなきもあかん
月のかへ侍ける時のほとりにてすゝ
よしめ侍けるに　業平朝臣

難波津をけさこそみつの浦ことにこれやこの世をうみわたる舟
時よ何なすして月をうらみくこりを侍ける

河　　　　文屋康秀

白雲のやとる峯の小松原枝しけゝれや日の光みぬ
人まとおもひねしと我ふしろ男の扇まうれ
つまを待けり　去た

身はなれてむかしぬ物からしひしさは人の心はおもしなかり
なかし人の心を見る人さと露の命そあかりける
人のりとまりひさしうへちまつひてか
とくしかをさむありつとひて待それと

閑院大君　宗于朝臣女

白雲を小ちとへいそて嵐に山いてそら独こえん世

月秋ますきこれして
うむつきのみねた
今まなつ峯とあつふなりゐん山のそ
きく八月をくれし

後撰和歌集巻第十八

雑哥四

かへるをきゝて　よみ人しらず

我宿にあひやどりしてすむかはづ夜になれはや物はかなしき

をとこのまうて来りて侍ける女ありとはきゝながら
のりとかりこのはらからにいひかよはしてあひて
りけるを女とりかへしてあはせぬと(?)侍けれは

玉江こくあしかり小舟さしわけて誰を誰とか我はさためん

男のしのひにかよひける女のもとにありける女の
しきもふとおもひてさらにしてまかりしかは

まなことゝいひ侍けれは

みちのくのをふちの駒も野かふにはあれこそまされなつく物かは

中将にて内にさふらひける時あひしりて侍り
ける女蔵人のさしくしをつかはすとてかひおこせ
とやとしてとらせて侍りけるをほかにいとなりて
としへて後にまかり侍りける女のもとに
たまひけるをそこせしあはれなりとおもひて
侍りけるに　源善朝臣　従四位下左近中将 延喜元年正月左遷

いにしへもありもやすらん我は昔のなかりしを
なからよはなさて人のたれにしかは侍ける　京よ

ひたちへまかりける時に友たちに
たかへしける　よみ人しらす

あさなにみし都の人もしのふかな 立やまかへり小田のかはつに

とをき国に行ける人と京にのこりたるを
さしてあひまつに物してさなからとふさ
まされたる

そこひなき山の桜花ちりてもなをそにほふかるしら
さ
よみしらす　伊勢

いせの海の河は袖よりなかるれとふにとまらぬ身なりけり
北辺左大臣　嵯峨帝一源氏
貞観十年薨五十九

人めにもみえぬ山ちに立雲をたれすみかまの煙といふらん
男の人まもあまたとへ我やかくさるらんなと
いひけれは　伊勢

おほゐ川淵瀬にかはる心とはみなかみさえりの人もいふなり

人のむこなりしをとこのひてはりに
けるかすみなをこすける人のもとにまかりてひさしう
まうてこさりけれはおとうとこふりたりけるを
ありくかくなんめりといひつかはしける
女のおや　遊訓大金吾説他家同姓
妻母於之

今こんといひしはかりを命にてまつにけぬへしさくさめのとし

返し　もと　但又有顕綱朝臣説

数ならぬ身のみ物うくおもほえてまたるゝまてもなりにけるかな

とまるとそ侍りてくれけるに

かへりける　よき人よみす

ことゝさくをかくし山の井なる所にくるまをなくしてあかして

物まうてなりけるに志りある人のつれなきか

らへ二月なかをなかひていつる暁はいとさこ

あけなる志てつとめてとしかりけるとと

つかはし侍りけるとすとて

あのかれところもあさつゆも涙もありてもかくはなり

題しらす

人心あきてこれは白露のきゆるまも惜ひさしく君をまちわひ

世中といひつる物かかけろふのあるかなきかの程にも有ける

なかなかに待わひたる女のもとにひさしくなのりて

待ける男にとはれて待侍れはよみともに

なけきて

くり返しのやまれ世中につれなき人をなくさめるもあきそふかき

つねよなきなみなみにあらましけるを

伊勢

ちとせにかゝる我なみさすらめ人にしられぬ人のしるしを枕ともな

ねくなりかれありていひけれはあはれとこ
ゆめのうつゝてかれはうふそとといひける
まこし　こゝちかむかし

うれしきを思ふ心はしてわかねさめこそはなとこと
となりあかつけしとやうてゆくまつのそよ
　　　よみ人しらす

逢ことのまれに思ふのあまりなれはわかねともへは逢
ふもしらす

涙のうへにしつかにあらはさるへくなきくらはそ枕そとも
いろに思ひけるは
　　　伊勢

あひにあひて物思ふ比の我袖にやとる月さへぬるゝかほなる

あるまよひとのまへよりまかりてそれ物かたりしける
けるとさてうちよりさ女のゝ思ひそてなやく
物のあはれしりけはなかたらはあさましなと
こそとて
　　　よみ人しらす

あはれてふことにしるしはなけれともいはてはえこそあらぬ物なれ

女ともたちのもとよりひさしうおとつれさりけれは
くれとつまさりけれは十月はかりにある人
のもとよりいひしれたちのふみかよといひ
ひつかしみかりけれは竹のはにかきつけて

つかはしける　　　よみ人不知

うつろはぬ名にながれたる河竹のいつれの世にか秋をしるへき

題しらす　　　贈太政大臣

至五五
続千同
妹かひもとくとむすひしよのまに秋風の吹てなかるゝ

返し　　　伊勢

至秋中
心なき身は草木にもあらなくに秋くる風にうたかはるらん

題しらす

身のうきをしるへきにしもあらなくにあはれといひし人そこひしき

よみ人しらす

雲路をもしらぬわかみはかへりぬる雁のねさへそふかくきこゆる

まだきから思ひこき色にそめむとや若紫の根をたつぬらん

伊勢

見しよりも世の中心をしりては人のよそにぬとおもふゆへ

亭子院よりはらからひけるに御返しの

絶えせありけれは

伊勢の海によせかへりてもとゝしあまよりもみるめかなくはうらみぬへしと

粟田の家にかくれてよりつかはしける

右孫王けの朝臣

足引の山はなるとも（ヨリイ）岸のしづく雲をしらねは

左大臣の家にてかれこれ題をさぐりて歌

前よみける小露とのみふりしそへ侍く
ぬらしつれてくるに
我ならぬ草葉もものは思ひけり袖よりほかにおける白露
人のもとにつかはしける
伊勢
人心嵐のかせのさむけれはこのめもみえす枝そしをるゝ
と人をあひこゝふとこそて侍りける
よみ人しらす
うれしくも人をと志まんとしてそ我へそうらさりけれ
ある法師の源ひとしの朝臣家にまかり
てまつれすりとなしけるとあした
またをくるとて
うたゝねのとこふと袖の白玉は君かなみたの露やおくらん
返し
ひかりさへ草の枕におく露の何にさえんかそおもひ出らん
よみ人しらす
おもひやる方もしられぬ道さへ心まとひのつゆや有らん
むかしを思ひそてむかしれるの月緒よつらき
たゝ大臣
鈴虫よなとしねはそあれは昔の秋をおもひやりつゝ

ひとり侍ける比人のもとよりいかにそととふらひ侍れはあさかほの花につけて侍ける

よみ人しらす

夕暮のさひしき物は朝かほの花をたのめる宿にそありける

太政大臣の世侍けるにしのひにまかりかよひけ侍まて

法しゆゑ

そそ山峯の嵐の世をいとひてこのはとともにちるそおもむ

題しらす

こまちかあね

世中をいとひてあまのすむ方もうきめのみこそみえわたりけれ

昔おもひいてゝ侍りける人の内にさふらひけ

おりにつかはしける

伊勢

山川の音にのみきくもゝしきを身をはやなからみるよしもかな

人よりもわすれかねとて女のもとにつかはししける

よみ人不知

世中はいかにやいかに女の音をきくにも今は物やかなしき

返し

伊勢

世中はいさともいさや風の音は秋に秋そふ心ちこそすれ

題しらす

よみ人しらす

身にあまる露もひとりしき袖はおもひの秋もひとしきそなき

ほとゝきすけさたとへのなかしかれりにつゝ
しきつ
ほゝゑの空にたちまよひてもあらぬもこそやたのまれぬ
たゝし
風ふけはみねにわかるゝ雲のうへにかへりてやむとや
ゆふしみとりふかく
おほよそてふきのみとことゝにしげり
寛平内親王　母中宮　温子
むしらす
ともしこさうの見こと　均子
秋をふく人をこそふかありそ海の浦吹風のやむ時もなく
山田法師

是貞のみこの家にてよみなくるをわかるとし次将のめや
神無月のついたちころめにそへてとゝこ
ころりけるところをそいひなとしてつと
めて　よみ人しらす
いまはとて秋はてられし身なれともきりたち人をえやわするゝ
十月つこもりなりしにかきくらしけれはとそ小
山のかけにもこれをわけそひかへりつゝに
兼輔朝臣
思おきてこふるといふ萩の葉は色は昔にかはらさりけり
たかしん紙　坂上是則

男たちわてとしころ紀葉ゝとわかるゝもろかつの
しらすありけるにあつまよりまうてきてたけ
ところありとゝて京にかへりて侍る女
のもとに正月ついたちまてかくとつかはし侍
けれは　よみ人しらす
まつ人はきぬときけともあら玉のとし
のみこゆるあふさかの関

後撰和歌集巻第十九
離別　羇旅
みちのくにへまかりける人に火うちをつかはす
とて書付侍ける　貫之
おりくふ井てあくゝ火の煙あらは心さしにもと思へとそ思ふ
あひしりて侍ける人のあつまへまかりけるに
けるに櫻乃花のかたにぬさをしてつかはし
しける　よみ人しらす
わかるゝ人の手向におらるゝ櫻花あふ坂まてはちらすもあらなん
とをくまかりける人に餞し侍ける所にて

橘直幹

しひやらんかりはなしと行てかへらん岸のしつくを
しるしとつけにまかりける女よりみちにそへて
りしやる　よみ人しらず

梅さみ山よりふこねしますす鏡をこなたの新をむかへて
しらのへまかりける人によ兄摂つかはすとて
直幹

しらのなりあさま山ともあられは梅の煙ゆひやらん
とはこ人にまかるとけりとも雨ちふり
こちふそへて行かもしれ　しやる

このゆひも我とこゝ寒る摂かはらそんとひよ思かん
京に侍ける女子をいかなりける侍らんと
とそこめかさそいかなの出へまかりけれ
むすめ

打まそて岩いなの露の月はえぬかりそまとたのむ
世に侍りける人といかんとふりとなる
とさてきひのてはなとこしすれ摂
たくむしふさそとしまゆれをいむまとひ
くゆり　よみ人しらず

おしとおもふ心ハなくてこのたひハゆく馬にむちをおほせつる哉

返し

君かゝりをしゆく野の道は遠を雖かひにふるなるそかなしき

おなし家にすみ侍りける女の男の国に

おやの許きらとてひにあつかりけるに

菅原清して

今はとて立別ゆく旅人の不破の関路にあることかな

とさの国に侍りける人にあひつくわら

ありける男のうしろふかくさつけてはへるに

おほくるのありし　大窪則善

しきる

身をわくることのかたさにます鏡かけはかりをそ君にそへつる

この身ひとつにてたちわかれぬるおほゆるといひ

けれは　よみ人しらす

初雁の我も空なるほとなれは君も物おもふ旅にやあるらん

あひしりて侍ける女の人の国にまかりける

につかはしける　公忠朝臣

いとせめて恋しき旅のから衣ほとなくかへす人もあらなん

返し　女

から衣たつ日をよそにきく人は返すはかりのほとも恋しを

三月はかりにこしの国へまかりける人につかはしけ

あひミつゝいそふに　よみ人しらず

恋しくはとくともせんとゑさかれかハまつわか宿にあけ

善祐法師の伊豆の国になかされ侍ける

　伊勢

別てはいつあひ見んと思ふらんかきりある世の命ともなし

題しらす　よみ人しらす

そむきぬる松の子をせん稚よりもとこしなへにやといのりこし

返し

ともしふに志る波のそこなふいかはかりまてよみそひらん

亭子のみかとおりゐ給ふて又の年弘徽殿の

かへにかき付けゝる　伊勢

わかるれとあひもをしまぬもゝしきをみさらんことや何かかなしき

みかと御らんして御返し

身ひとつにあらぬ別をおしなへて行めくりてもなとかみさらん

みちのくへまかりける人にあふきてうしてつかはせ侍りける　よみ人しらす

別ゆく路の雲ゐになりゆけはとまる心も空にこそなれ

宗于朝臣のむすめみちのくへくたりけるに

いそきさりし山よ月をも送りてゆけきこゆひよそにこそ思

返し

くもりぬとたのみし君をさへ涙の雨よぬれまさりけり

男の伊勢の国へまかりけるに

君か行かたにありてふ涙川まつは袖にそなかるへらなる

あひしりける人にさうそくつかはすと
てそへて侍りける

袖ぬれて別はすともから衣ゆくとないひそきたりとをみん

返し

別路はこゝをゆかすか衣されは涙そたちさきにたちける

あひしりて侍りける人に扇つかはすとて

そへてやる扇の風し心あらはわか思ふ人の手をなはなれそ

友則かむすめのみちのくへまかりけるに
つかはしける　藤原滋幹かむすめ

君をのみしのふのさとへ行ものをあひつの山のはるけきやなそ

つくしへまかるとてこさいこ（清子）の命婦におく
りける　小野好古朝臣

年をへてあひみる人の別にはおしきものこそ命なりけれ

出羽よりのほりけるにこれかれむまのはな
むけしけるにかはらけとりて
源わたる

ゆくさきをしらぬ涙のかなしきはたゝめのまへにおつるなり

平のなかきとかいやしきゆゑありて人のくにへま
かりけるにいはなかりけれはたちとまらぬなん
ことなくいふはなかるへく浪間にさそはれとおもふせとなかる
あひおもひて侍けるひとの(か)くれにけるころの
ものへまかりけるによみておこせたりけるとて

よみ人しらす

我ものと思ひけるかな浦なくふく風山の嵐はけしく

返し

宿とのこといひおきて思ふまれゆきてたにいかなるけしき
秋風にひへまかりける人によみてやるとてみちの程に

つかはしける

妹ふくみひける人の手向にまかりみちにはまゐらねさらなり
西宮左大臣家の九月晦日にてまかりけり
ともなかる人によみてつかはすとて

大輔

とみちいとをしさと手向てしつ秋とゝまらぬゆくへしらぬん
とめてまかりきる人によみてつかはしける

伊勢

ゆきひくこゝろしてかへすはひとつゝ秋をかみなへてゆき

よみ人しらす

贈太政大臣

これとひてわらはなるもあるを聞て志らぬけさ人まて侍しき

返し　伊勢

ゆくかへる別し時よりあはせは我を涙におくれまし

よみ人しらず

雲霧のたちかさなりてわかるとも風のたよりに雁はかよはなむ

返し　伊勢

めにみぬ風にこゝろをあるへくはやかて霧わけたつるせめ

ゐなかへまかりける人につかはしける

実る世は行かひなきをわかれてさへね宿をかさね世にこそ行を

舟にて物へまかりける人につかはしける

なをまたともそへんにのりてこゝろ波のともとある舟みてたゝ

返し　よみ人しらず

舟ならはおまへ川そてりあてんこともなさすゝ

舟にて物へまかりける人

ふもとより涙ぞ袖とちおもはゆるへつる舟にのりくとしく

返し　伊勢

なき行我は袖にぞせきとむる舟こぎすゝむふなさきとしうき

ともまちて雨によりて女のもとへ行かゝりけり　貫之

三超ともこひむといひてまかれはあひみまてはおもひまさ侍る

羇旅部

あら人いやしきうなゐありて遠江へまかるとて
てらつを川をわたるとてよみ侍ける

よみ人しらず

初瀬川うきせはへやわたるらん世にはなかれてうき秋月とも
多かるしなとみえて

名ふし松かはらに思ひ出て遠江のおもてなみ世にもえ
あつまへまかりけるにはるかに方なくしておもひ
えけるに河をわたりけるになきぬらしける
と見えて

業平朝臣

いとしくもわかくて見れは山しくをこひなみの那
三し山へまうてけるにみち中よりたちとの
今はとて行かなかに　よみ人しらず
都まてきこえふりなる白山はゆきつゝかきてにかにかり
おりけれは心さらかのかたへまかりてなむ侍
けるにみちにて女のおやにやとりてひつきて
さゝてなおもしろかりけれはなこり行ていやとゝ
まれとはかりて由りあかれはさねと
行とてさまかくかへかさくなくりける

中原宗興

山里に第宅の露しき志をきらんとみの心を春にすさとをよき
去たちはなりのこりけり舟よりてみ侍
けうふ山のはなそて月乃波のなかより出
やよみてけるといふ安倍乃仲麿か
りもろこしにてふりさけみけるといふこと
をおもひやりて　從二位家隆
都にて山のはに見し月なれと海より出て海にこそ入
法皇家のあれたるふる郷らんしけ御
ことふく　菅原右大臣
あひ見しいにしへやなかりしは猿乃衣にあちやかさねん

たまへりきえつそてにひくらしの山をはなれ侍りて
むかしの山ちとてみさまよふけてこれをしとはかなみちてらせう
初瀬へまうつとて山のへとのふるまりかく
よみ侍ける　伊勢
草枕のひとなりおふ山のへよ立つ雲やかねてしをるらんやと
ふるさとのやまのふ雨を
ありせにくきさあふ河ゝ立つしらなみのおとをきゝみねはみちてえ
海乃かたりかくこれをきせしえし侍ける
つのくにの　こゝち
花さくみちをみねふかく海の浪よりきこえたる波

あつまなる人のもとへまかりけるにはへりし
かへりて思ふ女の京へのほりけるにつかはし
けるによめる　寂静法師
あはれ関の山ちと思ふ人はこゝろもしらねともよそなから
法皇と申す所に山すみし侍て京よりかへり
侍けるに思ひやれる人あまたまかりけるにともに
さそひ給けれはよみてつかはしけるに
僧正聖寳
人とはぬしとのゝひとりてなけくともなりにきつる
みたよりつゝそのかけゝるに舟ひらきて

月をみて　清少納言
てる月のあかゝりさみしさはわかれにし人の生なりにしかへりにし
時しらす　亭子院御製
草枕秋風むすふ人のこゝろをくてよそにてなしゝまし
京よりさふ人のもとへまかりてことある所よりかへりてまかりて
きけるたよりにて侍りて九月ありけるに
よみ人しらす
思ふ人ありてうきことは心のうちに侍よりもひとの秋そあさき
草枕ゆふてなりはなみたや露もなみたもおきまさりけり
家のあさきことに京よりにて法皇あまりけり

けふにあはせしとありて

素性法師

秋山にまとふ心を宮たきの瀧の志らあわにけちやはててん

後撰和歌集巻第二十

慶賀 哀傷

女八のみこ元良のみこのためなに四十賀し

侍けるにきくの花をかさしにおりて

藤原伊衡朝臣

万世の霜にもかれぬ白菊をうしろやすくもかさしつる哉

典侍あきらけいこちゝの宰相（佐時）のためなに賀

し侍けるに玄朝法師のもとよりこきぬぬい

てつかはしたりけれは

典侍あきらけいこ

源遠敬

別当

佐時

敦忠一子

母源遠敬別当

天延三年右少弁

春宮大進

貞元二年正月正五下

母讓日五年春宮亮

雲わけてあまくたりける家なれはこそ君か千とせはよはひさかへめ

題しらす　太政大臣　貞信公

としふれとかはらぬ松の世にしあれはことしとまつるそ

（章明三品弾正尹母兼輔卿女　永祚二年九月薨）

のちまちてこれかれこゝろみねりしけり日はそひし

侍けるに右大臣これかまことまことせ侍らん

けり

[illegible]　中務

こ嵐も行もちとせの身はするにはゝ人の息ひはかゝるらん

賀のやしなふるし侍ける所にて

よみ人しらす

りとせといふをも我はまてあつしそふかなめかおそすらむ

左大臣の家にてむすめのこ女かうふりし侍

けるに　　[illegible]　貫之

大原やをしほの山のこ松原はやこたかかれ千世のかけみん

人のうまやりする所にてふちれ花をさき

して

よみ人しらす

ときはなる波のもとさはされ千世松風やさそにあらん

女のもとにつかはしける

君かためある松の千とせをつみぬともこれからまさん秋の世をとれ

年星をへたてゝ女檀越のもとへつかはす

とりて侍けるにくはへてつかはしける　貫之

ゆうせい法師　雄海

りとせよやそとせそへていのりつる玉ひらのしと君みさへや

たた大臣の家にきしそく侍しをくるとて

よみへけり

僧都仁教

きしそふとはへて御さへ万代に花のさかりとんたつかな

今上帥のみこときこえし時太政大臣の家に

わたりおはしましてかへらせ給ふをくり

物に琴をたてまつるとて

太政大臣　貞信公

君かためいはふ心のふかけれはひしりの御世のあとならへとそ

今上御製

返し

をしへおくことたかはすは行末の道とほくともあとはまとはし

今上むかしあつかはおほしましし時ゐさゝこ

らもてまゐらせまつり侍ける

山人のこれるたきゝは君かためおほくの年をつまんとそ思ふ

返し

御製

年のかすつまんとおもふ心にはいとゝおほえけれと志え

東宮の御まへにて重行らへ侍を給ひける

あり　こゝよ宿

君かためいはひそめてうゝる呉竹はちよの色こそねかふこゝちそすれ

院の殿上にて宮の御方より碁盤いださ
せ給ひけるにいけれ給ひけり

命婦いさきよき子 清子

おのゝえはくちむもしらす君か代のつきん限りはうちこゝろみよ

西宮家のかんこれ歌乃山まて女宮のみこのもとに

右大臣

なとみてら松のみとりも枝さしておりつゝ千世を継とみえん

十二月ばかりにかうら給りすゝめて

清少納言

いふとみとなにむ春ふる雪と年くれてえこそ惜しまね

哀傷哥

あつらしき月隠りけむとまくこさうて

敦敏蔵人右少将

かはまよりゐをくりて給へれし

左大臣

隠ところぬ人をあけつ東路よ秋をわてそ恋しかりける

贈太政大臣
延木九巳月九日薨卅九
干時権中納言左大将

あふ乃事くみにく一條ありまうりて

太政大臣 貞信公

春の夜の夢のなかにも思ひきや君なき宿をゆきて見むとは

可有作者名 読人不知

返し

やとられぬねても覚めても恋しくて夢うつゝともわかれさりけり

先帝おはしまさて世中を思ひなけきてつかさなしけつ　三条右大臣
なからへて世にふるよりは山さとの草木となりましものを
返し　兼輔朝臣
山さとの宮の草木と君かなりなは我はしつくにぬれつゝや
時もちの朝臣身まかりてのちそれかうち
くなりて人のもとよりいかに思らんといひ
をこせられけれは　時望朝臣妻
別にしとそてとも思ほえし逢さとの涙なけきまて
女宮のみこれふこの御もとにつけて閑院
のみこ　右大臣
あはれなき花にちるらん宿をおもかけ形見なれにけるかな
返し　閑院のみこ
住たちしさとのおもかけ見えしにはいとゝ思ひの草をつむかな
宮女のみこにそとふらひ給て
伊勢
こゝらよときく中にも逢さきは人の涙もつきやしぬらん
天慶元年十一月よし
返し
よみ人しらす
宮人も哀てふなる別にはいとゝ涙そつきせさりける
先帝おはしまさて又の年の正月一日より

侍けり　　　　三條右大臣

いさつかに世やられなんわすれしき老の初は昔なりけれ

返し　　　　兼輔朝臣

なく涙ふりにし年の衣手はあたらしきにもかはらさりけり

かさねてつかはしけり

三条右大臣

人の世のおもひにかなふ物ならは我身は君におくれましやは

めの身まかりてのちよみ侍ける前の人よ

かのすみ侍ける時かきつけて侍けるてを

見侍て　　　　兼輔朝臣

寝ぬ夢に昔のかへを見つるよりうつゝに物そかなしかりける

あひしりて侍ける女の身まかりにけるを

こひ侍けるあひたに夜ふけてちとりなきけれは

侍りけれは　　　　閑院左大臣

夕されはいねかてにするをしひとりしてつまこひすなるちとりかなしき

七月はかりに左大臣の（寛平源氏娘子　母女御藤原新子　藤原真相女）むすめ身まかりにける

時よみ侍けるあひしれる人さらはいのちや

ま萩のもとをおりてつかはしける

太政大臣

女郎花花の名なれはなかはりしまむ人はまつ咲なむとまてしてとも

手

なくなりにける人の家にまかりてよりて
のおほしあふりしこなかりし人にはけらしける
伊勢
なき人の影たに見えぬやり水のそこは涙になかしてそこし
亭まそに侍りける母身まかりてのちらなれ
まかるとて
ひとりゆくことこそうけれ故郷のならひて見し人もなき
法皇にはふくまかりける時によむへきかさく
まかせて人にをくり侍りける
京極御息所

菅原のこゝろもとすてしみ時はきこそてねそこへ
女児乃かんこれゆくれ侍りける時
太大臣
此のまてゝ世をなけきし君とわれとそのやまさとにあひなさる
前坊（文彦太子　延長元年三月廿一日薨廿一）うせ給ひての春大輔につかはしける
さくらみの都にれむなる
おもひきやこゝろにしてもとあはれゆく鶯乃ねをそなかるゝ
返し
大輔
なくなりてなかなか日はへて鶯の昔乃春をこひやりつゝ
わかれし年の秋

りやとふにきえにし秋の露けかりからん袖とおもひけるや

玄上朝臣女

延喜九年参議刑部卿
兼平十二年従三位
三年薨七十八

清正か枇杷大臣のいみにこもりて侍けるに
つかはしける　　　藤原守文

世中はいかにきくとをきさにかく白露そ涙なりける

返し　　　ここよなへ　　　清正

きくにみな露きえぬる人の世をとめにし袖をとひやせん

兼輔朝臣なくなりてのち土左乃くによ
りまかりのほりて　かのあはたにて

つらゆき

ひきうゑし二葉乃松はありなから君か千とせのなきそかなしき

そのついてにかしこなる人

君まさて年はへぬれと古郷につきせぬ物は涙なりけり

人のをこひよはりてこもりけるにまやく
なくなりにさとひ侍けるはかえそのも
みちよかきつけを侍ける

戒仙法師

世のはかなき人をおもひし同しくに袖ぬれみちのくにそふまゝ
あくなりて侍ける人のこりのこて侍らぬ
小野乃ふる日ひとりひて侍けれはし

よみ人しらず

袖ひく時ふりつゝ秋月まはふつとあとともなく行雲かり

人のいまそくりてれ歌まいりける日

あてよ君はいつと待らともたてるまの家とみまほし

敦忠朝臣身まかりて又のとしかの朝臣

の西なる家に人々とそこれかれまかりてあ

そひし侍りけるついてによみ侍りける

清正

君かいにしかたやいつれそ白雲のあるしなきやとゝみるそかなしき

おやのまさしふちにまかりてこそりけると

きゝつかはしけるところにまかりてはしめと

人のいひをこせたりけれは　よみ人しらす

思ひ人のぬれきぬきせし君からそは夜のたもとそ色みまさる

返し

よそにのみ袖ぬれしらし春夜涙は花とみゆるそまされ

読人しらす　伊勢

頼もなく雅とそくもある世中れにとおもいはいかてこうてみそ

人となりてかさりなくこひてまいり

てねたる秋の夜よみえけるはかりとひける人

ふくらんといひつかはしたりけれは

雲上鈴良女

時雨のみなくさめつらん袖のうへにふみなき我そぬれける

返し　大輔

あきされなくはなむ人もわすれゆくかなをあらしふくとき

在原としはるか身まかりにけることをきゝて

伊勢

みそてあるに霧月れはしひもやらん花をはなとは
むとつゝいひ待けりの人のひとつなくありに
それはともはまつらいてなき待けまいは
のふり待けつに

なく〳〵もおもひて渡るのかねと雲ゐ上よりあまくたるらん
めの身はなりてなれとしのはるすれつとも
つれ日暮のことゝひ待けり

兼輔朝臣

なき人のともにしかへる年ならはくれゆくけふはうれしからまし

返し　読人不知

こふるまに年のくれなはなき人の別やいとゝとほくなりなん

天暦五年十月晦日於昭陽舎撰之
為勤人左近少将藤原伊尹別当
寄人讃岐大掾大中臣能宣河内掾清原
元輔 学生源順 上総少掾紀時文
御書所預坂上望城也謂之梨壷五人

御筆宣旨奉行文 源 順
左親衛藤亞将者當世之賢士也雖釼在腰
按則秋霜三尺雖黄自口吟又寒玉一聲遂于晩度
仙殿之綺莚衛此扉筆之綸命天下孫知愚鰥不朽
艷情相慕之臣肯陸揚本筆之振英聲於万葉花
山僧之馳高興於外雲而亦傳人間之塵翻未賜聖上
之恩遂見今思古鄭武帝於千時天暦五年歳次
辛亥玄英初攫之月未草将盡（ツキナムトスル）之朔也

天福二年三月二日庚子重以家本終書功
干時頽齢七十三眼昏手疼寧成字哉
桑門明静
同十四日令讀合之書入落字了訖

此集通憲云蔵人少将之時奉行之由見于此奥
萬壽按察大納言之筆定頼卿本之由致
信尋出彼本校合 二十巻也 色紙形表紙 云殊珍重
或抄云此大納言筆者六巻之丁年と号云 於此本者全不異他 假名七字也
ゆくさきのとし　ゆとゝりせ去
おとゝゝり
そよみともなく　とをやまさとたりなる　あるゆ説
作者　宮少ね　此本又説
おもの梅　又説
そちさそのうへつまなる哉
あまの海てく　此家説

北野行幸　みゆき　おほむらしやうと稱云

陽成院乃みかとのおほむとき

にて乃孫なりけるみこの御子ひとつありてふちと姓給り

こ給上むかしよしあそんれむとあさら

のへれこれのり

正徳二年四月首校之

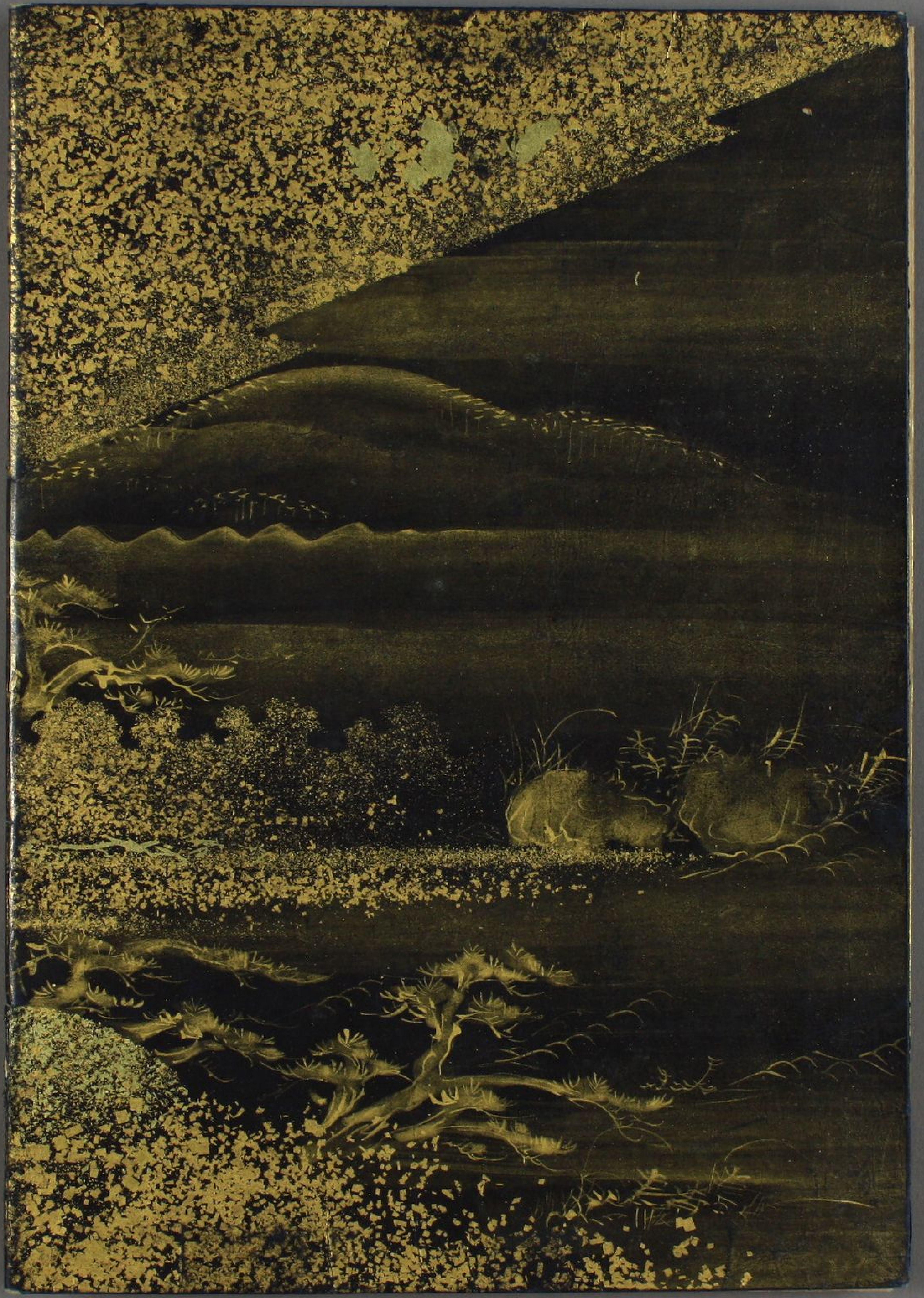
世間人云傳之說

題しらす　よみ人しらす　古今集

題しらす　よみ人も　後撰

題よみ人しらす　拾遺抄集

臣文命云此說不定事也京出也　院之本

皆以古今之新書

今見此本果而如古今如此乃後人可稱充